

第III章 遺 跡

1 遺跡の概観

A 平城京造営以前の地形

平城京は奈良盆地北部の標高約50～80 m、全体として北から南に傾斜する沖積地にある。さらに細かくみると、東二坊大路以東は東から西に、西一坊大路以西は西から東に傾斜し、中央付近は北西から南東に緩やかに傾斜する。調査地は、平城京の中央やや南に位置し、東からの斜面と北西からの斜面によって構成される谷筋の西側にあたる。以下では、今回の発掘調査で得られた知見や航空写真の判読結果、周辺での発掘調査の成果等も総合して、調査地における平城京造営以前の地形について、その概略を記す。なお、遺構検出面の標高は約54.25～54.70 mで、第252次調査区の本調査区と西北拡張区が接する付近が高く、四方に傾斜する地形で、第254次調査区南西隅がもっとも低い。

平城京の
地 形

調査地における遺構検出面は、奈良時代の遺物包含層が部分的に残る以外は沖積世の自然堆積層である。この層は単純なものではなく、平城京造営以前の蛇行する幅数 m から約15 m、深さ数十 cm から約 2 m(溝底標高52.5 m)の流路が縦横に通り、複雑な様相を呈している(Fig. 8)。

平城京造営
前の流路

一方、これらの自然堆積層を深く削り込んでいる東一坊大路西側溝の底(標高53.60 m 付近)や七条条間路北小路南側溝の底(標高53.60 m)では、それぞれ自然堆積土中に自然木を確認しており、前述した流路より古い大きな流れがあったことがわかる。しかし、これらの平城京造営以前の流路および自然堆積土の時代を確定する手がかりを得ることはできなかった。

近年、調査地周辺における発掘調査では、弥生時代、古墳時代等の奈良時代以前の流路を多数確認している(Tab. 3, Fig. 9)。これらのことから、平城京造営以前、調査地を含む一帯は、旧佐保川の度重なる氾濫に伴って形成された氾濫原のような地形で、低湿なところであったといえよう。ところで、今回の調査で、東一坊大路路面位置において竪穴住居跡を検出したが、それは、低湿ななかにあっても、ここが微高地であったことを物語っている。深さ約10 cm 程度を残すのみであったことは、平城京造営時、あるいはそれ以降に、削平されたためと考えられよう。

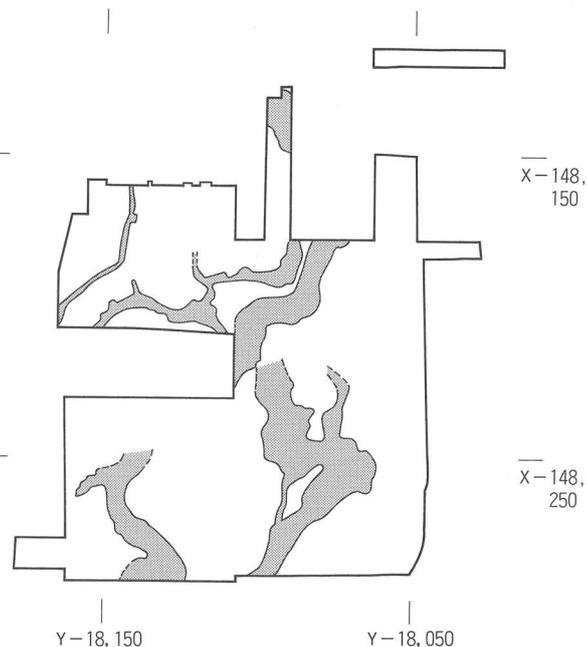


Fig. 8 平城京造営以前の地形(●は流路跡) 1 : 2,500

Tab. 3 調査地周辺の流路

No	時期と種別	地点	文献
1	弥生時代の流路跡	左京八条二坊一坪	奈良市教委「平城京左京八条二坊一坪の調査」『奈良市概要 昭和60年度』 pp. 36・37 1986 第98次
2	古墳時代の流路跡	左京六条二坊七坪	奈良市教委「平城京左京六条二坊七坪の調査」『奈良市概要 昭和63年度』 pp. 41・42 1989 第162次
3		左京六条二坊二坪	奈良市教委「平城京左京六条二坊二坪の調査」『奈良市概要 昭和63年度』 pp. 43・44 1989 第163次
4	奈良時代以前の流路跡または氾濫原	左京六条二坊三坪	奈良市教委「平城京左京六条二坊三坪の調査」『奈良市概要 昭和57年度』 p. 49 1982
5		左京六条一坊十坪	奈良市教委「平城京左京六条一坊十坪の調査」『奈良市概要 昭和56年度』 pp. 202・203 1982
6		左京六条一坊十一坪	榎考研「奈良市柏木町398・399番地（平城京左京六条一坊十一・十六坪）の調査」『奈良県遺跡調査概報1987年度（第2分冊）』 pp. 217-221 1989
7		左京六条一坊十二坪	奈良市教委「平城京左京六条一坊十二坪の調査」『奈良市概要 昭和58年度』 pp. 42・43 1984
8		左京七条一坊九坪	奈良市教委「平城京左京七条一坊九坪の調査」『奈良市概要 昭和62年度』 p. 44 1988 第128次
9		左京七条一坊十六坪	本書



Fig. 9 調査地周辺の流路検出地点 1 : 20,000

B 平城京廃都後の地形

『日本三代実録』貞観6(864)年11月7日条などが示すように、廃都後80年の平城京は、かなり開墾が進んでいた。調査地周辺でも、時期は降るが、安元2(1176)年の左京七条一坊十四坪東大路¹⁾、建長6(1254)年の左京九条一坊^拾之内²⁾の水田としての土地売券の史料が残っている。今回の調査地周辺の畦畔は、奈良時代の条坊制に由来する地割を示しており、左京七条一坊十六坪四周に大路2条と坪境小路2条の検出が予測された(Fig. 10)。

六条大路とその両側溝は条坊遺存地割を呈する水田の中に収まる。発掘調査の結果では、南側溝は東一坊大路西側溝と合流するところで南に広がるが、その水田も南に広がっており、地割が南側溝廃絶時の状況を反映している。遺構そのものは検出できなかった十六坪北辺の築地も、その想定位置には水田の畔が東西に残っている。東一坊大路とその両側溝も条坊遺存地

条坊遺存地割

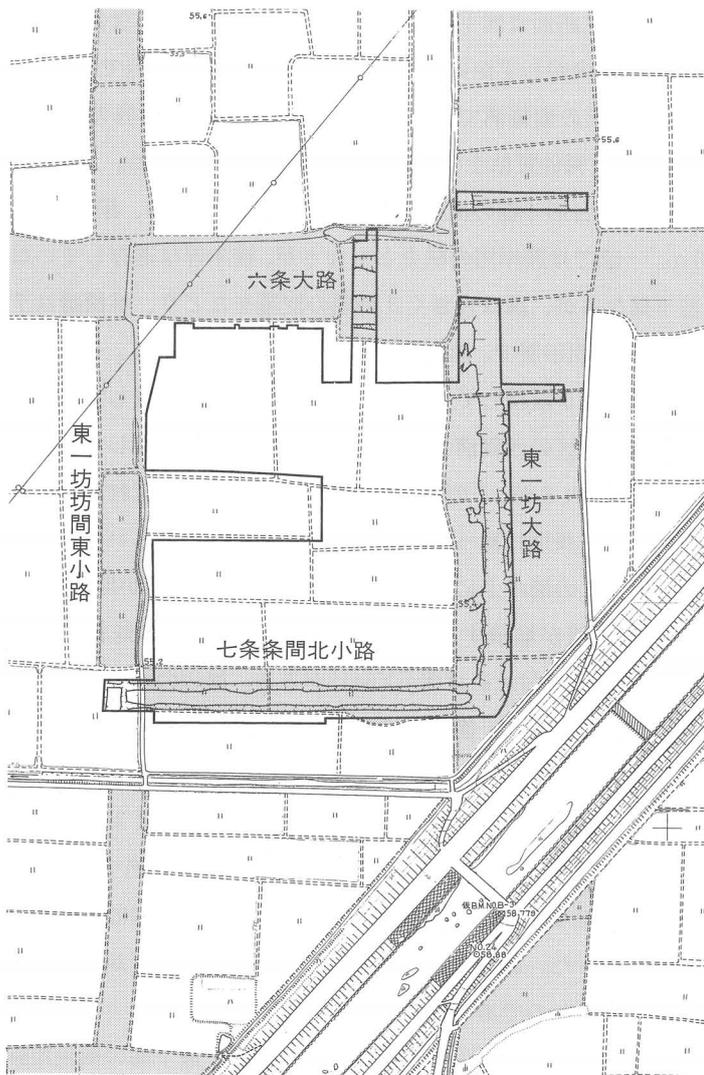


Fig. 10 調査地周辺の遺存地割 1 : 2,500

割を呈する水田の中に収まり、大路と水田の東西中心線は、ほぼ一致し、この地割は二条条間路から八条条間路近くまで続いている。ただ、遺存地割の方が大路規模より東西幅があり、水田化するにあたり東西に拡張したと考えられる。なお、遺存地割の西端、すなわち、西側の水田畦畔の位置は、西側溝を検出する過程で、南北大溝とした暗灰粘質土の西端とほぼ一致する。

一方、七条条間北小路と東一坊坊間東小路は、それぞれの両側溝ともに条坊遺存地割を呈する水田の中に収まるが、道路中心線は水田の中心線からずれる。これは幅の狭い小路を水田とするには適当でなかったために、それぞれ北と東に拡張したのであろう。

1) 『平安遺文』第7巻 3750 春日灌預中臣祐政田地売賣券

2) 『鎌倉遺文』第11巻 7727 尼妙性田地売賣券

2 条坊遺構

5次にわたる調査で検出した、平城京の条坊に関連する遺構は、東一坊大路、六条大路、七条間北小路、東一坊坊間東小路の計4条の道路とその両側溝である。

A 東一坊大路(Pl. 4・8・9・13・18、Ph. 2・3)

東一坊大路
の路面

東一坊大路 SF6410は、調査区の東辺でその西側溝を延長約137 mにわたって検出し、東拡張区でその東側溝を長さ約5 m検出している。両側溝を確認できた X-148,190付近では、その心々間距離は22.5 m、東側溝の幅3.0 m、西側溝の幅7.8 mで、路面にあたる平坦部の幅は17.1 mである。路面上で竪穴住居跡 SX6412、土坑等を検出しているが、砂利敷等の舗装材は検出されず、シルト質のいわゆる地山からなる。路面は削平を受けていると考えられる。なお、検出した路面の標高は約54.2~54.4 mで、中央がわずかに高くなっているが、ほぼ平坦である。

東側溝

東側溝 東側溝 SD6411は断面が浅い皿形の素掘溝で、幅3.0 m、深さ0.25 m。溝底の標高は53.95 m。堆積層は下から青灰粘質土、灰褐砂質粘土の2層に区分できる(Fig. 11-2)。

西側溝の
変遷

西側溝 西側溝 SD6400・6520は断面が逆台形の幅の広い素掘溝で、幅7.5~8.6 m、深さ1.5~1.7 m。溝底の標高は52.5~52.6 m。一部では護岸用の杭をとまうが、横木等は遺存していない。堆積の状況は場所によって若干異なるが、溝は大きく3時期の変遷をたどり、堆積層は7層に区分できる(Fig. 11-1)。最下層は褐色粗砂層で、溝底から溝の側面に残っている。その上には木屑層が堆積し、さらに青灰色砂質土層が堆積している。この段階で溝を掘り直しており、その後の堆積が暗灰砂層である。北東拡張区の西側溝西岸近く、暗灰砂層中で検出した曲物を埋設した遺構 SX6422は取水施設と考えられるが、この層の堆積環境は、一時的な流れがあったにせよ、定常的な流れが長期間続いたり、長期に亘って滞水することがなかったという珪藻分析の結果(第V章2参照)とも矛盾しない。この層の上には、暗灰粘土層と青灰細砂層が堆積する。さらにこれらの堆積を開削し、灰色粘土層が堆積する幅3 m弱、深さ0.9 m程の蛇行する溝 SD6414となる。調査区東辺中央の QK ライン付近には堰 SX6413がある。周辺の水田への導水施設になるのであろう。堰は杭と石でできており、横木等は遺存していない。堰の下流には幅約3.2 m、深さ0.5 mの溝 SD6415が取り付けられている。堰は後にほぼ同位置で杭と横木によるしがらみから成る堤 SX6452に造り替えている(Fig. 13)。SD6414は南流したのち堤によって堰き止められ、溝 SD6416を経て東側に送水された。この堤によって、堤南側の溝は廃絶する。ところで、第251次調査区では、調査区の東端3.2 mのところから西側が沼状遺構 SX6402となり、東一坊大路とその両側溝を検出できなかった。おそらく、西側溝にこの堰または堤が設けられたことにより、東一坊大路上が沼状になったのであろう。

各層の堆積時期については、出土した紀年木簡や土器が手がかりとなる。最下層の褐色粗砂層からは奈良時代初めから中頃の土器が出土している。また、天平20年(748)、天平勝宝7年(755)、天平宝字年間(757~764)の紀年木簡をはじめ、天平12年以降である可能性の高い「里」を記さない国郡郷表記の荷札木簡が出土していることから、奈良時代中頃までの堆積と考えられる。次の木屑層からは奈良時代後半以降の土器や天平2年(730)から宝亀3年(772)までの年記

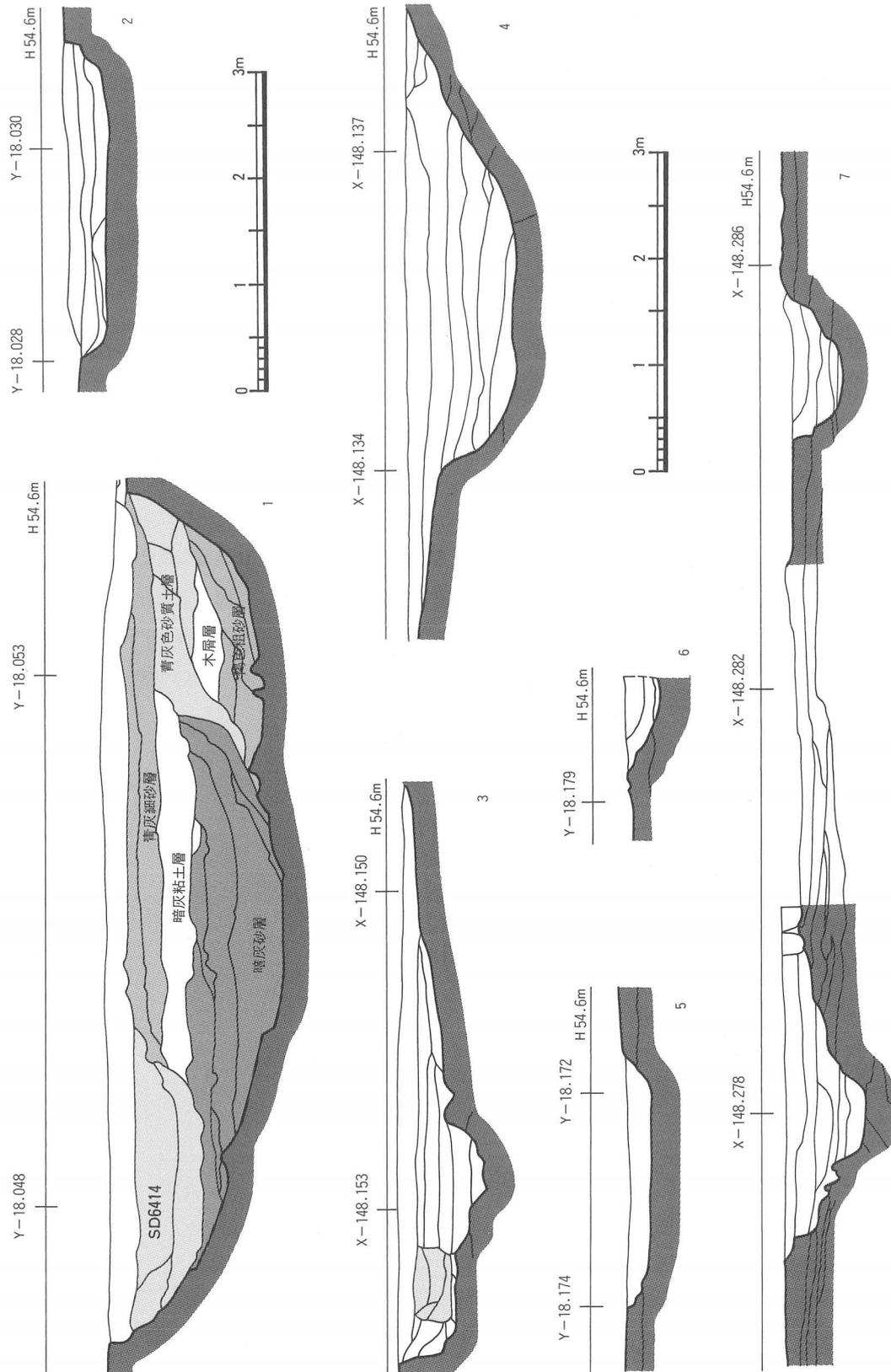


Fig. 11 道路側溝土層図 1 : 60

1. SD6400 2. SD6411 3. SD6499 4. SD6451
 5. SD6535 6. SD6536 7. SD6471・6472

西側溝の
勾配

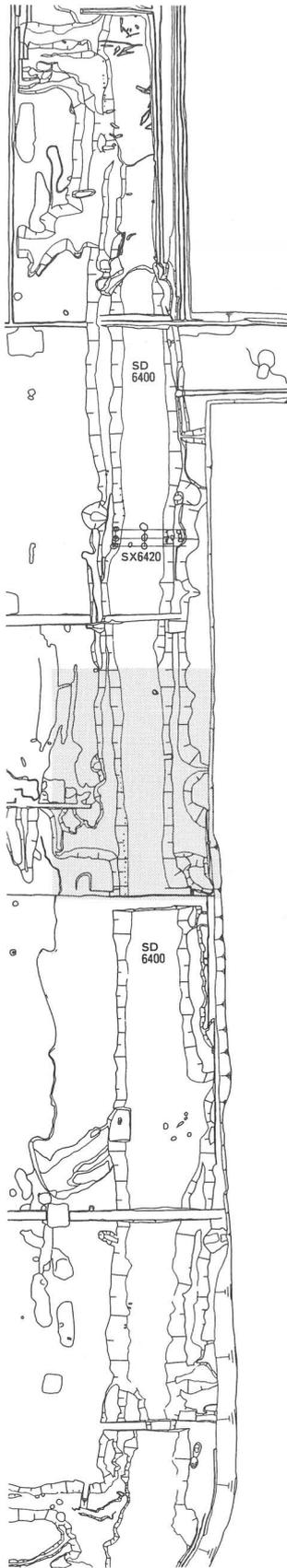


Fig. 12 東一坊大路西側溝
1 : 600

をもつ木簡が出土しており、奈良時代後半以降の堆積と考えられる。青灰色砂質土層からは遺物がほとんど出土しなかった。奈良時代末に、これらの層を除去する大規模な改修を行っており、その後に堆積した暗灰砂層からは、天平宝字7年(763)の年紀をもつ木簡や土馬の他、奈良時代末から12世紀までの土器が出土している。この堆積層上の暗灰粘土層、青灰細砂層からは、12世紀までの土器が出土する。堰および堤を伴う溝の埋土である灰色粘土層からは、12~13世紀の土器が出土し、最終的に、西側溝はこの時期に廃絶したと考えられる。

ところで、東一坊大路西側溝は、今回の調査地より上流において、数ヶ所の調査例がある。溝底の標高から、それらの間の勾配を示したのが Fig. 14 である。これによると、西側溝は五条条間北小路までは0.4~0.5%の勾配で、五条条間北小路から六条大路までは0.2%、さらに、今回の調査区内では0.1%となり、平城京南半で、特に今回の調査区において勾配が緩くなる。また、東一坊大路西側溝の集水域としては、これまでの発掘調査の知見や遺存地形から、平城宮内では、南面東門の壬生門を通る南北中軸線から東で、東院の南東隅を除いた部分まで含む。

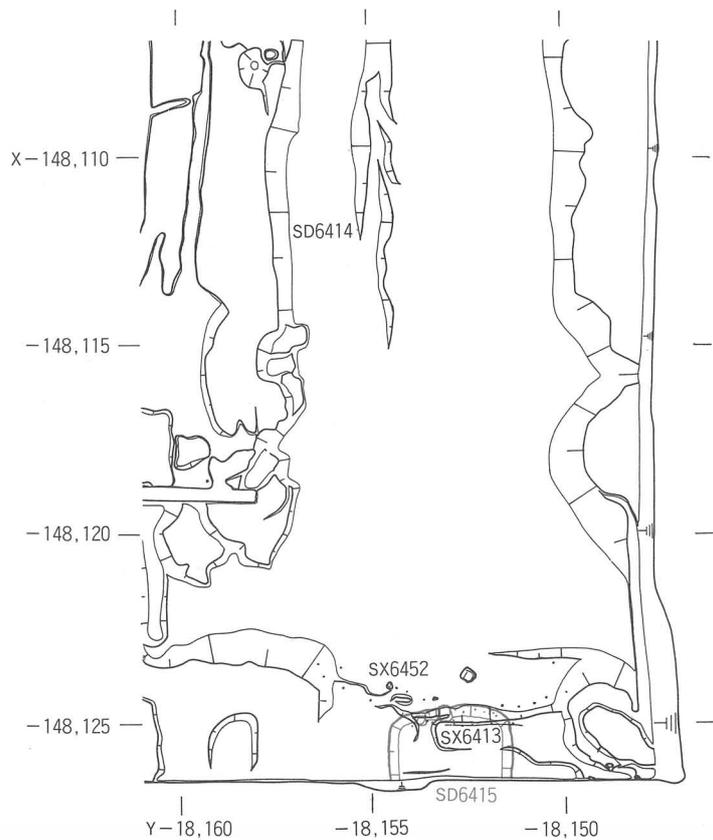


Fig. 13 堰 SX6413と堤 SX6452 1 : 200

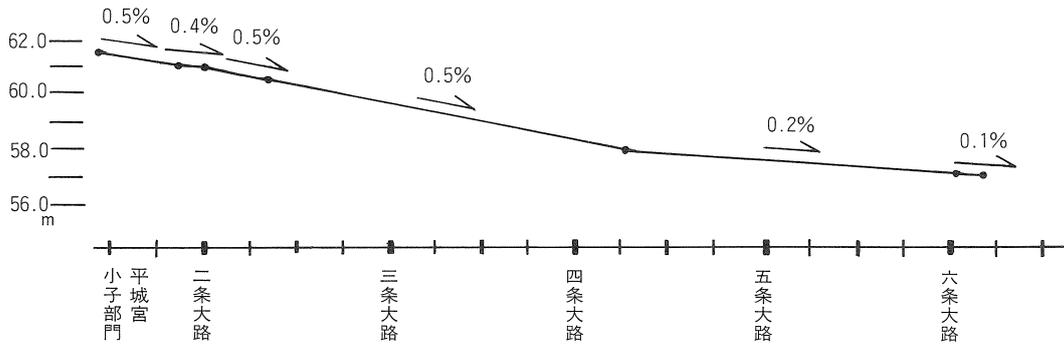


Fig. 14 東一坊大路西側溝の勾配

したがって、西側溝から出土した遺物についても、溝底の勾配だけからみれば、平城宮の一部も含めた上流で破棄されたものが本調査区内で堆積したと考えることもできよう。しかしながら、暗渠や橋脚、あるいは京内で既に破棄されたものなどが流下の障害となりうることを考えれば、その可能性はかなり低くなるであろう。

B 六条大路(Pl. 3、Ph. 4)

北西拡張区で六条大路 SF6450の路面および両側溝を長さ約 8 m にわたり検出した。溝心々距離は14.3 m で、路面幅は8.6~9.0 m である。遺構検出面は北側へ下がっており、標高は南側溝南岸が54.5 m、六条大路路面中央付近で54.4 m、北側溝北岸が54.2 m である。また、検出面は沖積層の粘質土と平城京造営以前の斜行する流路に堆積した砂質土である。六条大路路面上の北側溝南岸近くでは土器埋納遺構 SX6448を検出している。

六条大路の規模

南側溝 南側溝 SD6499は幅5.0~5.5 m、深さ0.9 m の素掘溝で、溝底の標高は53.9 m。堆積層は下から青灰粘土、灰色粘土、灰黄シルト、茶灰シルト、黄褐土の順である。茶灰シルトまで埋まった段階で、南寄りに幅0.7 m、深さ0.3 m の小規模な溝を掘り直している (Fig. 11-3)。南側溝は北西拡張区では、六条大路の路面側に大きく広がっており、北東拡張区の東一坊大路西側溝との合流点付近では、3.4 m 程南に広がっていた。また、北東拡張区において、南側溝の北岸も検出すべく X-148, 138.8までトレンチを入れたが溝の上がりすら確認できず、西側溝との合流点では南北に大きく広がっていたのを確認したにとどまる。遺物としては、少量ではあるが、奈良時代前半の土器が出土した。

北側溝 北側溝 SD6451は幅4.5~4.7 m、深さ0.7 m の素掘溝で、溝底の標高は53.4 m。溝の上部は南側溝同様に六条大路の路面側に広がっており、それを含めると幅は5.9 m になる。堆積層は下から灰褐砂、灰黒粘土、暗灰粘土、暗灰砂質粘土、暗灰シルト、黄灰砂質土の順である (Fig. 11-4)。暗灰粘土層および灰褐砂層から奈良時代の荷札木簡がそれぞれ1点が出土しており、奈良時代の堆積ではあるが、南側溝同様、出土した遺物は少ない。

C 坪境小路(Pl. 14~18、Ph. 5)

七条条間北小路 七条条間北小路 SF6470は、東一坊坊間東小路西側溝から東一坊大路西側溝までの約124 m を検出した。両側溝の心々間距離は7.0~7.4 m で、路面幅は4.5~5.0 m であ

七条条間北小路の規模

る。遺構検出面は粘質土または砂質土のいわゆる地山で、標高は東一坊坊間東小路との交差点で54.3 m、東一坊大路西側溝付近で54.05 m となっており、東に0.3%弱の勾配をもつ。

北側溝 SD6472・6612は素掘溝で、東一坊坊間東小路の路面を横切り、同東側溝と交差して東一坊大路西側溝まで達する。東一坊大路路面上には延長部にあたる溝はない。溝の規模は東小路との交差点部分が幅1.0～1.8 m、深さ0.15 m と小さいが、十六坪に面する部分は幅1.5～2.7 m、深さ0.3～0.8 m である。東一坊大路西側溝との合流点付近では、護岸用の杭を伴うが、横木等は遺存していない。溝底の標高は、東一坊坊間東小路付近で54.0 m、東一坊大路西側溝との合流点の西約18 m では53.4 m で、東へ0.6%と緩い勾配であるが、合流点付近では急勾配になる。溝の最深部は溝の北寄りにあり、部分的に掘り直しが認められる。溝の堆積は大きく3層に区分でき、埋土は下から下層が灰色粘土、灰褐粘質土、中層が灰褐砂質土、褐色砂質土、上層が黄灰褐砂質土、淡灰粘質土である (Fig. 11-7)。下層には奈良時代初頭から中頃、中・上層には奈良時代後半から平安時代の土器を含む。

南側溝 SD6471は素掘溝で、幅1.4～2.4 m、深さ0.3～0.8 m。東一坊坊間東小路の路面を横切らず、同東側溝から東一坊大路西側溝まで達する。東一坊大路路面上の溝の延長部は調査区外になる。また、南側溝は Y-18,083 付近から東側が国土方眼座標系に対して、東で北に振れる角度が大きくなる。溝底の標高は東一坊坊間東小路付近で54.0 m、東一坊大路西側溝との合流点付近で53.6 m であり、東へ0.4%の勾配である。溝の堆積は大きく2層に区分でき、埋土は下から下層が灰色粘質土、灰橙粘質土、灰褐粘質土、上層が暗茶褐砂質土、明黄褐砂質土である (Fig. 11-7)。下層からは奈良時代初頭から中頃、上層からは奈良時代後半の土器が出土した。東一坊坊間東小路寄りには祭祀土坑 SX6530があり、中央やや東寄りに橋 SX6525が架かる。部分的に掘り直しがあり、そこからは、奈良時代末の土器が出土した。

祭祀土坑

東一坊坊間東小路 東一坊坊間東小路 SF6535・6615は七条条間北小路との交差点を含む形で約10 m を確認した。東一坊坊間東小路の路面検出面は粘質土の地山で、標高は約54.3 m、路面幅は5.2～5.5 m。交差点内には土器埋納遺構 SX6533がある。

東側溝 SD6534・6614は幅約2 m、深さ0.2～0.4 m の素掘溝。七条条間北小路両側溝との合流点付近では幅2.0～2.5 m で、七条条間北小路と交差する部分ではやや狭く、幅1.5 m となっている。溝の埋土は、暗黄灰粘質土である (Fig. 11-5)。七条条間北小路との交差点には東側溝を渡るための橋 SX5632がある。

西側溝 SD6536は、その東岸のみを長さ約6 m にわたり検出した。溝心は調査区外になるため、規模は明らかにできなかった。溝の堆積層は下から明灰褐粘質土、明茶褐粘質土、暗灰褐粘質土である (Fig. 11-6)。

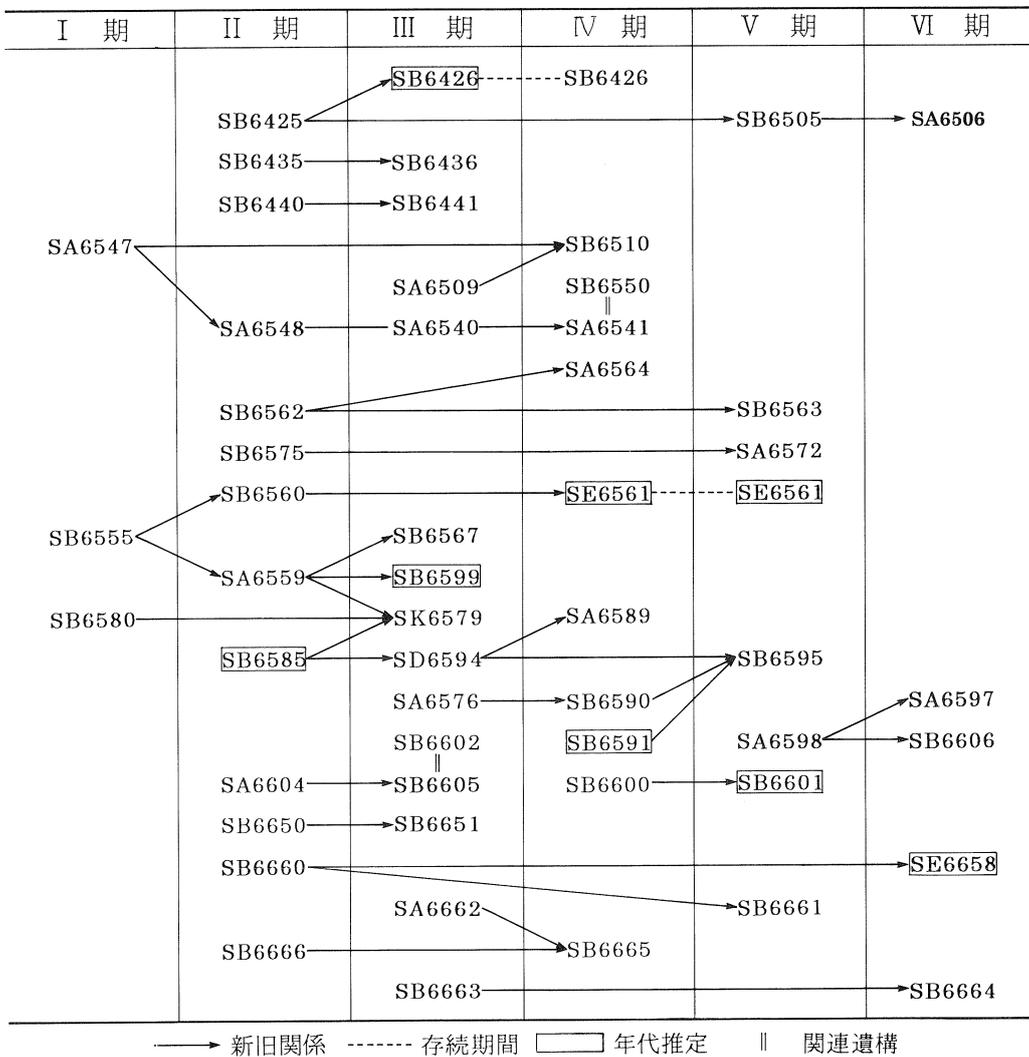
3 十五坪・十六坪の遺構

平城京左京七条一坊十五・十六坪では、4次にわたる調査で、建物58棟、堀49条などを検出した。しかし十五坪については北辺から5m足らずの発掘にとどまっており、遺構も小規模建物4棟、堀2条などを検出しただけである。かつ、遺構に伴う遺物も少なく、遺構の時期を知る手がかりは皆無といってよい。したがって、本稿では、時期別に記述していない。

十六坪については、条坊道路側溝で囲まれた坪のほぼ3/4を発掘調査しているが、遺構の重複関係が少なく、遺構の時期を決定できる遺物の出土も乏しい状況である。また、多くの遺構は、整然とした配置計画に基づいている様子が認められない。しかも、遺構の時期を知りうるわずかな手がかりからは、遺構の方位と時期が必ずしも一致しないことが明らかになっている。したがって、遺構の重複関係・位置関係、出土遺物などの乏しい手掛かりから、時期・変遷を推定せざるをえない。ここでは遺構を時期別に記述しているが、この時期区分は一案として提示するものである。伴出遺物や重複関係から新旧を判断しうる主な遺構を Tab. 4 に示す。

坪の3/4を掘

Tab. 4 遺構の新旧関係



A 奈良時代以前の遺構

SD6484 6AHG—Q・6AHH—H 地区 (Pl. 13)

旧 流 路 十六坪の南東部を北東から南西へ流れる斜行溝で、平城京以前の旧流路である。この流路が自然の堆積で埋没した後、東一坊大路西側溝 SD6400が掘削されている。国土座標に対し北で東に55°振れる。幅4 m、深さ50 cmで主に白色粗砂が堆積する。東一坊大路西側溝 SD6400の西岸から長さ6 mほどを検出するにとどめた。

SD6621 6AHH—H 地区 (Pl. 6)

十六坪北西部にある東西素掘溝。幅50 cm前後で長さ10 mを検出した。SB6620西妻通の柱穴に切られる古い溝である。

SD6642 6AHH—H・I 地区 (Pl. 5、Ph. 20)

十六坪の北西部で検出した旧流路の堆積である。発掘区北端では東一坊坊間東小路東側溝 SD6614から30 mに位置し、25 m南流したのち南西に向きを変えている。

SX6412 6AHG—R 地区 (Pl. 9)

東一坊大路
路面上の
竪穴住居

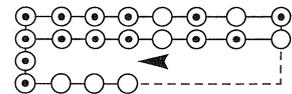
東一坊大路 SF6410の路面上で検出した竪穴住居である。東西4 m、南北4 mであるが、東辺は3.7 mと北東角が南へ縮む。北西隅に小穴1個を検出。貼床と考えられる黒褐色粘土・黄褐色粘土混じりの暗青灰色砂質土の底部5 cmほどが残るのみで、周堤は削平されている。建物内に柱穴は検出できなかった。時期を示す遺物は出土していないが、古墳時代の遺構であろう。

B 奈良時代以降の遺構

i 十五坪の遺構

SB6469 6AHH—G 地区 (Pl. 16・17、Ph. 16)

十五坪の北辺中央にある北廂付掘立柱東西棟建物。東一坊大路西側溝 SD6520西岸から46 m、七条条間北小路南側溝 SD6471から0.5 mに位置する。北で西へ2°00'の振れを測る。桁行7間×梁行



2間で、北廂がつく。柱間寸法は梁行・桁行とも6尺であるが、東2間が8尺、7尺と延びる。廂の出は4尺で、造営尺は29.5 cmを測る。北小路南側溝とは近接しすぎており、共存し難い。

なお、建物遺構に添えた平面模式図の記号は、○：掘形・抜取穴のみの柱穴、◎：柱痕跡を残す柱穴、●：柱根を残す柱穴であることを示す。

SB6522 6AHH—G 地区 (Pl. 16、Ph. 16)

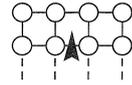
十五坪北辺中央西寄りの掘立柱南北棟建物で、北妻から1間分を検出した。東小路東側溝から52 m、北小路南側溝から2.5 mに位置する。北で東へ0°30'の振れを測る。桁行2間以上×梁行2間で、柱間寸法は桁行5尺、梁行6尺、造営尺は30.0 cmを測る。柱穴の重複関係から SB6523より古い。



SB6523 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

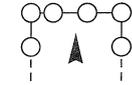
十五坪北辺の中央に近い掘立柱東西棟総柱建物で、北側柱から1間分を検出した。北小路南側溝から2 mに位置する。北で東へ2°30'の振れを測る。桁行3間×梁行2間以上で、柱間寸法

は桁行・梁行とも6尺、造営尺は29.5 cmを測る。柱穴の重複関係からSB6522より新しい。北小路南側溝に近接しており、共存し難い。



SB6524 6AHH-G 地区 (Pl. 16)

十五坪北辺中央西寄りの掘立柱東西棟建物で、北側柱から1間分を検出した。東小路東側溝から46 m、北小路南側溝から2.5 mに位置する。北で東へ3°00'の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は梁行6尺、桁行は6尺で西端間のみ4尺に縮む。造営尺は30.0 cmを測る。SB6523と重なるが、前後関係は不明である。



SA6526 6AHH-G 地区 (Pl. 16)

十五坪北辺中央西寄りの掘立柱東西塀。東小路東側溝から41.5 m、北小路南側溝から3.5 mに位置する。東で南へ1°50'の振れを測る。2間の塀で柱間寸法は4.5尺を測る。北小路南側溝の橋SX6525の南東にあり、これと関係する可能性もある。

SA6527 6AHH-G 地区 (Pl. 16)

十五坪北辺中央西寄りの掘立柱東西塀。東小路東側溝から36.5 m、北小路南側溝から3 mに位置する。東で北へ2°10'の振れを測る。2間の塀であるが、柱間寸法は4.5尺、6.5尺と不揃いである。造営尺は30.0 cmを測る。東方にSA6526があるが、一直線には乗らない。

SE6466 6AHH-G 地区 (Pl. 18)

十五坪の北東隅に近い井戸。七条条間北小路南側溝から2 m西側溝西岸から8 mに位置する。掘形は南北2 m以上、東西1.7 m、残存深さ145 cm。井戸枠は遺存しない。埋土は青灰色粘土と暗灰色砂質粘土が混交しており、近世の遺構と思われる。

SK6521 6AHH-G 地区 (Pl. 16)

十五坪北辺中央、SB6469西の隅丸長方形土坑。北小路南側溝から2 mにある。南北2.8 m以上、東西1.7 m、残存深さ75 cmで、40 cm以下を2段掘する。底は灰緑色粘土で井戸でない。

SK6528 6AHH-G 地区 (Pl. 15)

十五坪北西隅、七条条間北小路南側溝SD6471に並行する溝状土坑。北小路南側溝の南3 mに位置する。東西11.8 m、南北2.0 m以上、残存深さ25 cmで、平城宮土器IV~Vが出土した。

SX6465 6AHH-G 地区 (Pl. 18)

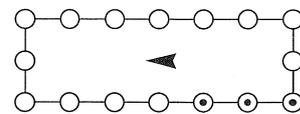
東一坊大路西側溝SD6520内の十五坪北東隅に南北に並ぶ小杭4本。総長1.7 m、杭間隔2尺足らず。杭径10 cm前後。奈良時代の西側溝の護岸しがらみ用の杭と考えられる。

ii 十六坪の遺構

a I期の遺構

SB6555 6AHH-G・H 地区 (Pl. 11・16, Ph. 13)

十六坪南半のほぼ中央にある掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から60 m、七条条間北小路心から15 mに位置する。北で西へ1°25'の振れを測る。桁行6間×梁行2間で、柱位置の歪みが多少大きい。柱間寸法は桁行8尺、梁行7.5尺、造営尺は29.4 cmを測る。平城京造営初期の仮設的な建物であろう。重複関係からSK6553・SK6556より新しく、SB6560より古い。北西隅柱から

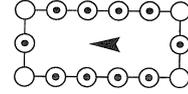


平城京造営
に関わる
建 物

SB6570南西隅柱まで北へ2 m(7尺)、西へ4.5 m(15尺)離れる。

SB6570 6AHH—H 地区 (Pl. 11、Ph. 12)

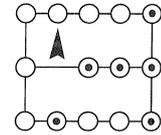
十六坪南西部の掘立柱南北棟建物。北で西へ1°50′の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、柱位置は多少歪むが柱間寸法は桁行5.5尺、梁行6尺、造営尺は29.5 cmを測る。SB6555の北西隅柱から西へ4.5 m(15尺)、北へ2 m(7尺)離れる。SB6655と同様、平城京造営初期の仮設的な建物であろう。



SB6580 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

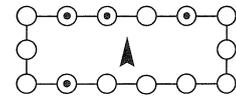
床をもつ可能性のある建物

十六坪南西部の掘立柱東西棟建物。東小路東側溝から21 m、北小路北側溝から12 mに位置する。東で南へ4°30′と大きな振れを測る。桁行22尺、梁行19尺、造営尺は30.0 cmを測る。柱配置は桁行4間×梁行2間であるが、特に桁行方向で柱間が不揃いである。棟通りに小柱穴を検出したが、西妻から1間目の柱穴を欠く。この小柱穴が床東であったとすると、東半に床を張った可能性もある。



SB6652 6AHH—I 地区 (Pl. 5、Ph. 20)

十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。東小路東側溝から12.5 m、北面築地雨落溝想定位置から21 mに位置する。北で西へ3°00′とやや大きな振れを測る。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行7尺、梁行6尺、造営尺は30.0 cmを測る。南へ6 m(20尺)離れて SA6644、北へ6 m(20尺)離れて SA6655があり、2条の塀に挟まれる。



SA6546 6AHH—H 地区 (Pl. 11)

十六坪南半ほぼ中央の掘立柱南北塀。西側溝西岸から55.5 m、北小路北側溝から29 mに位置する。振れは微小である。北端で東西塀 SA6547に取りつく。柱間2間で、柱間寸法は南から15尺、12尺で、造営尺は29.5 cmを測る。

SA6547 6AHH—H 地区 (Pl. 11)

十六坪南部半ほぼ中央の掘立柱東西塀。西側溝西岸から53 m、北小路北側溝から37 mにある。中央の柱を SA6546と共有する。東で北へ1°40′の振れを測る。2間の塀で、柱間寸法は8.5尺、造営尺は29.5 cmを測る。柱穴の重複関係から SB6510・SA6548より古い。

SA6549 6AHH—H 地区 (Pl. 11)

十六坪南半中央の掘立柱南北塀で。西側溝西岸から58 m、北小路北側溝から40 mにある。北で西へ4°30′と大きな振れを測る。柱間1間で、柱間寸法は7.5尺、造営尺は29.5 cmを測る。柱穴の重複関係から SA6540・SA6548より古い。

SA6571 6AHH—G・H 地区 (Pl. 11・16)

十六坪南西部の SB6570の南西にある掘立柱南北塀。北で東へ1°30′の振れを測る。5間の塀で、柱間寸法は6～7尺である。SB6555の西14.7 m(50尺)、SB6570の西6 m(20尺)にあり、両者を区画する。

SA6644 6AHH—I 地区 (Pl. 5・6)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。北面築地想定位置から28.5 mに位置する。北で西へ2°10′と少し大きな振れを測る。7間の塀で、柱間寸法は6～13尺と不揃いである。SB6652の南6 m(20尺)にあり、これに伴う塀と考えられる。

SA6655 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の SB6652 の北の掘立柱東西塀。北面築地雨落溝想定位置から 19 m に位置し、SB6652 から 6 m (20 尺) 離れる。3 間の塀で、柱間寸法は 5 尺、造営尺は 30.0 cm を測る。

SD6430 6AHH—H 地区 (Pl. 7・8・12・13、Ph. 22)

六条大路南側溝南岸から 60 m 南にある東西素掘溝。幅 1 m、深 0.2 m。坪の東半部で、全長 34.7 m を検出した。西端は未発掘部分へ続くものと考えられる。東端は西側溝西岸から 18 m の位置で止まる。溝東端から 5.5 m、西側溝西岸から 23.5 m の位置で一旦途切れて地橋 SX6429 をもち、東端が坪東辺に達しないことから、坪内の排水溝にはなりえない。西端は未確認であるが、少なくとも坪東西二等分線付近までは続くものと推測される。これが坪西辺まで達するとすれば、坪全体を南北に区画していた可能性もある。ただし六条大路心・七条条間北小路心からほぼ等しい距離 (69 m) にあると見ることもでき、道路心々距離を二分した坪内の地割遺構である可能性もある。

地割溝の
可能性

SE6557 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

十六坪南西部の SB6555 の西側の方形の井戸。北小路北側溝から 13.5 m に位置する。南北 2.1 m、東西 1.6 m の掘形と、南北 0.8 m、東西 0.9 m の円形の抜き取りを検出した。SB6555 の建設時に、SE6558 を造り替えたと考えられる。重複関係から SK6554・SA6559 より古い。

坪内最古の
井戸

SE6558 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

十六坪南西部の SB6555 の西側の方形大土坑。北小路北側溝から 15 m に位置する。南北 2.5 m、東西 2.8 m の掘形と、南北 1.2 m、東西 1.5 m の円形抜き取りを検出した。SE6557 より古く、SB6555 の建設前に用いられた井戸と考えられる。

SK6507 6AHH—H 地区 (Pl. 12)

十六坪南東部、坪中心に近い円形大土坑。西側溝西岸から 51 m、北小路北側溝から 42.5 m に位置する。掘形は南北 2.3 m、東西 1.9 m、残存深さ 70 cm。法面は緩やかで、湧水のない砂層で断念した井戸か。底近くから高杯脚、埋土上層から須恵器甕が出土した。

SK6553 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

十六坪の南辺中央にある土坑。南北 7.6 m、東西 2.5 m で北小路北側溝から 5 m に位置する。平城宮土器 II が出土した。北の掘立柱南北棟建物 SB6555 の造営前の土坑と考えられる。

SK6556 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

十六坪南半中央部の方形土坑。掘立柱南北棟建物 SB6555 と重なり、SB6555 より古い。南北 3.6 m、東西 3.1 m で、平城京造営時に井戸として掘られたが、湧水がない等の理由ですぐに放棄されたと考えられる。

SK6596 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

七条条間北小路北側溝の北側の東西に長い不整形土坑。北小路北側溝から 1.5 m に位置する。南北 3.7 m、東西 9.2 m 以上で発掘区の西方に続く。南北棟建物 SB6599 より古い。

SX6429 6AHH—H 地区 (Pl. 7・12、Ph. 22)

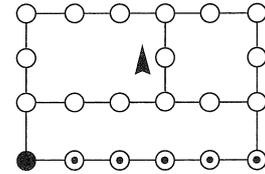
SD6430 の東端から 5.5 m にある地橋。東西 1.3 m を掘り残している。西側溝 SD6400 西岸からは 23.5 m に位置する。溝を渡る通路とも考えられるが、SD6430 が地割溝であったとすると何らかの目印であった可能性もある。

b II期の遺構

SB6425 6AHH—H 地区 (Pl. 12, Ph. 8)

II期の正殿

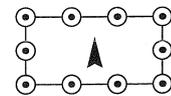
十六坪南東部の南廂付掘立柱東西棟建物で、この時期の正殿と考えられる。西側溝西岸から24 m、また北側柱は北面築地南雨落溝から60 m(200尺)、北小路北側溝から60 mに位置する。SD6430までは6 mの余地があり、SD6430の地橋部 SX6429は、この建物の東妻とほぼ揃う。北で東へ0°25′の振れを測る。桁行5間×梁行2間の身舎に南廂がつく。棟通りの東から2間目に小柱穴を検出しており、間仕切りがあった可能性がある。南廂の西端柱穴には柱根が残り、残存長41 cm、直径20 cmで、7寸に復原できる。柱間寸法は桁行の中央3間が8尺、両端各1間が8.5尺、梁行は8尺、廂の出は10.5尺で、造営尺は29.5 cmを測る。廂の出が5寸の端数を含むのは、廂を後に付加したことを示すのであろうか。身舎柱径は不明だが、仮に1尺とすれば、その外面から10尺測って廂の柱を建てたとも考えられる。身舎北東隅柱の抜取穴から平城宮土器II～III古が出土している。後に同位置で廂を廃した SB6426に建て替える。



SB6435 6AHH—H 地区 (Pl. 7, Ph. 8)

十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。西側溝西岸から35.5 m、北面築地南雨落溝から40.5 mに位置する。北で西へ2°00′の振れを測る。桁行3間×梁行2

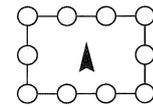
間で、柱間寸法は桁行8尺、梁行6尺、造営尺は30.0 cmを測る。SD6430の北6 mにあり、SB6440と9 m、SA6433と2 m離れる。南東に少しずれて SB6436が重なるが、柱穴は重複しない。



SB6440 6AHH—I 地区 (Pl. 7, Ph. 8)

十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。西側溝西岸から36.5 m、北面築地南雨落溝から27.5 mに位置する。SB6435から北へ9 m(30尺)離れ、西妻の位置がほぼ揃う。振れは微小である。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁間とも

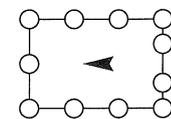
7尺、造営尺は29.5 cmを測る。後に柱抜取穴を利用して SB6441に建て替える。



SB6495 6AHH—G・H 地区 (Pl. 13, Ph. 9)

正殿付属の建物

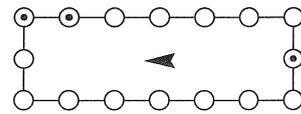
十六坪南東部の掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から16.5 m、北小路北側溝から21 mに位置する。北で東へ0°30′の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行8尺、梁行8尺だが、南妻面は4.5、7、4.5尺の3間に柱を建てており、南妻入の建物と考える。造営尺は29.5 cmを測る。SB6525から南へ21 m(70尺)、東へ3 m(10尺)離れる。



SB6560 6AHH—G・H 地区 (Pl. 11・16, Ph. 13)

十六坪南半中央の掘立柱南北棟建物。北小路北側溝から15 m、坪東西二等分線から2 mに位置する。北で東へ1°20′の振れを測る。桁行6間×梁行2間で、柱位置は少し乱れるが、柱間寸法は

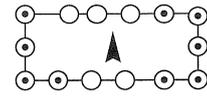
桁行8尺、梁行7.5尺、造営尺は29.5 cmを測る。柱穴の重複関係から SK6556・SB6555より新しい。SA6548の西2.4 m(8尺)、SA6559の北1.95 m(6.5尺)に位置する。



SB6575 6AHH—G 地区 (Pl. 15, Ph. 14)

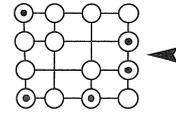
十六坪南西部、坪南辺に近い掘立柱東西棟建物。坪東西二等分線から西へ22.5 m(75尺)、北小

路北側溝から6.5 m(22尺)に位置する。SA6559からは南へ3 m強(内法10尺)離れる。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行5間×梁行2間である。柱間寸法は梁行は6尺等間を測るが、桁行方向の柱位置は不揃いで、南側柱通りでは東から6、7、6、6、6尺、北側柱通りでは東から6、6、6、5、8尺である。造営尺は29.5 cmを測る。柱穴の重複関係から SA6572・SK6578より古い。



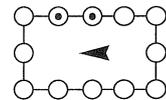
SB6585 6AHH—G・H地区 (Pl. 10・15, Ph. 14)

十六坪南西部の掘立柱南北棟建物。北小路北側溝から19 m、東小路東側溝から18 m(60尺)に位置する。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行3間×梁行3間である。建物内部の2柱穴を欠くが総柱建物であろう。柱間寸法は梁行は5尺等間であるが、桁行は6.5尺で北端間のみ5尺に縮み、かつ北西隅柱が南へずれる。造営尺は30.0 cmを測る。SA6584の南10 m(35尺)、SA6559の北5.5 m(18尺)にあり、柱穴の重複関係から SK6581・SD6594より古い。南西隅柱の抜取穴から平城宮土器II～IIIが出土した。



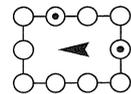
SB6625 6AHH—H・I地区 (Pl. 6, Ph. 19)

十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SD6430から北へ18 m、東小路東側溝から39.5 m、坪東西二等分線の西15.5 mに位置する。北で東へ2°00′の振れを測る。桁行4間×梁行2間で、柱間寸法は梁行は6.5尺等間、桁行は南2間が5.5尺、北2間が6尺である。造営尺は30.0 cmを測る。SB6660から南へ50尺離れ、東妻から30尺に東側柱が位置する。後出 SB6647とは東側柱どうして30 m(100尺)離れる。



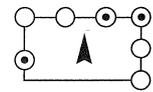
SB6647 6AHH—I地区 (Pl. 5, Ph. 20)

十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SD6430から25 m(85尺)、東小路東側溝から10.5 m(35尺)に位置する。振れは微小である。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は梁行は6尺等間であるが、桁行は全長17尺を3等分するようである。造営尺は29.5 cmを測る。前出 SB6625との間隔は東側柱どうして100尺を測る。



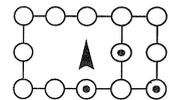
SB6650 6AHH—I地区 (Pl. 5, Ph. 20)

十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。SD6430の北28 m、北面築地雨落溝想定位置から22 mに位置する。桁行3間×梁行2間であるが、柱位置の歪みはかなり大きい。柱間寸法は桁行北側柱は7尺であるが、東端間が6尺に縮む。梁行東妻は5.5尺等間であるが、西妻は中央柱が棟通りから南へ2尺ずれる。造営尺は30.5 cmを測る。SB6660の南9 m(30尺)、前出 SB6625の東8.5 m(29尺)に位置する。柱穴の重複関係から SB6651より新しい。



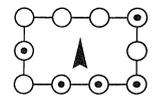
SB6660 6AHH—I地区 (Pl. 5, Ph. 20)

十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。北面築地想定位置から8.5 m、東小路東側溝から28 mに位置する。北で東へ1°30′の振れを測る。桁行4間×梁行2間で、柱間寸法は梁行が6.5尺等間、桁行は東2間が5.5尺、西2間が6尺で、造営尺は30.0 cmを測る。SB6666とは南側柱どうして30尺離れる。SB6625の北西隅柱から北へ50尺、西へ30尺に南東隅柱が位置する。重複関係から SD6642より新しく、SE6658より古い。



SB6666 6AHH—I地区 (Pl. 5, Ph. 18)

十六坪北西部の掘立柱東西棟建物。北面築地の南雨落溝想定位置に接する。東小路東側溝から24 m(80尺)に位置する。北で東へ1°10′の振れを測る。桁行3



間×梁行2間で、柱位置の歪みが大きい、柱間寸法は梁行が6尺、桁行は全長20尺を3等分している。造営尺は29.5 cmを測る。

SA6433 6AHH—H 地区 (Pl. 7・8)

十六坪北東部の掘立柱東西塀。北面築地南雨落溝から46 m、SB6435の南2 mにある。東で北へ0°50'の振れを測る。全長20 m、12間の塀で、柱間寸法は5～11尺と不揃いである。

SA6548 6AHH—H 地区 (Pl. 11)

坪を東西に
二等分

十六坪南半部中央の掘立柱南北塀。東一坊大路西側溝SD6400の西岸と東一坊坊間東小路東側溝SD6534の東岸から等距離(200尺)にあり、十六坪を東西に二分する。北で東へ0°20'の振れを測る。北小路北側溝から26 mの位置から北へ6間分を検出したが、北端を井戸SE6543掘形で攪乱されており、さらに北へ延びる可能性がある。第255次調査区では検出されておらず、未発掘部分の坪の南北二等分線付近で止まると推定される。柱間寸法は8.5～10尺と不揃いだが、造営尺は29.5 cmを測る。西方の南北塀SA6576との間隔は29.5 m(100尺)である。柱穴の重複関係からSA6547より新しく、SA6540より古い。

SA6559 6AHH—G 地区 (Pl. 15・16、Ph. 14)

坪の南から
八分の一

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から北へ14.5 m(50尺)にあり、坪の西半を南北に八分する。東で南へ1°20'の振れを測る。19間分を検出し、発掘区西方へさらに延びる可能性がある。柱間寸法は7～10尺と不揃いである。SB6560の南1.95 m(6.5尺)、SA6566の北10.5 mに位置する。柱穴の重複関係からSB6555・SK6557より新しく、SB6567・SB6599より古い。

SA6566 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

十六坪南辺中央部西寄りの掘立柱東西塀。北小路北側溝から3 m弱(9尺)に位置する。北で東へ0°25'とわずかに振れる。2間の塀で、柱間寸法は東から10尺、9尺と不整である。

SA6576 6AHH—G・H 地区 (Pl. 10・15)

坪を東西に
四分

十六坪南西部にある掘立柱南北塀。坪内を東西二分するSA6548の西29.5 m(100尺)にあり、坪内を東西に四分する。北で東へ0°40'の振れを測る。全長122尺を検出したが、柱間寸法は南から27、28、18、9、10、12、18尺と不整で、中間の柱穴を欠くようであるが、造営尺を29.5 cmとすると良く合致する。区画塀ではなく、地割用の仮設的な柱列と考えられる。南端近くでSA6559・SB6575と重なっており、地割確認後ほどなく取り払われたのであろう。

SA6604 6AHH—H 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。北小路北側溝から31 m、東小路東側溝から9 mにある。北で東へ0°20'の振れを測る。3間分を検出しており、柱間寸法は5.5尺を測り、造営尺は30.0 cmと推定する。SB6585の北6 m、西9 m。柱穴の重複関係からSB6605より古い。発掘区の西へ続く建物の可能性もあり、梁行2間、柱間寸法6尺ほどの総柱建物を考えると東小路東側溝まで5.5 m(18尺)の余地がある。

SD6446 6AHH—I 地区 (Pl. 3・6)

十六坪の北端近くで検出した東西素掘溝。幅0.7～1.1 m、深0.4 mで、六条大路南側溝南岸との間隔は4.5 mである。築地築成土は確認していないが、坪北面築地の南雨落溝と考える。

SE6653 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の井戸。東小路東側溝から15.5 mにある。SB6647からは北へ4 m、東へ1 m、

SB6650からは北へ4 m、西へ7.5 m、SB6660からは南へ4 m、西へ9 m に位置する。井戸掘形から平城宮土器II、井戸枠採取穴の灰褐粘質土から平城宮土器IIが出土した。

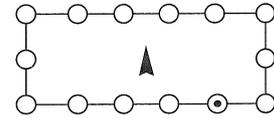
SK6423 6AHH—I 地区 (Pl. 4、Ph. 21)

十六坪の北東隅にある南北に長い土坑。南北長5.1 m、東西幅1.5 m、深0.8 m が残存する。漆容器の須恵器や漆器が出土した。

c III期の遺構

SB6426 6AHH—H 地区 (Pl. 12、Ph. 8)

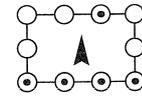
十六坪南東部の掘立柱東西棟建物。SB6425の南廂を廃して同位置で建て替えたもので、この時期の正殿 SB6500の後殿と考える。北面築地南雨落溝から60 m、西側溝西岸から24 m に位置する。振れは微小である。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行の両端各1間が9尺、中央3間が8尺、梁行は8尺、造営尺は30.0 cm を測る。SB6500と東妻を揃え13 m(45尺)離れる。



SB6425の建て替え

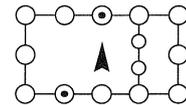
SB6436 6AHH—H 地区 (Pl. 7、Ph. 8)

十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。SB6435を位置をわずかに南東にずらして建て替えたもの。西側溝西岸から35 m、北面築地南雨落溝から42 m に位置する。北で西へ1°40' の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は梁行が6尺、桁行は6.5尺で、東端間のみ6尺に縮む。造営尺は30.0 cm を測る。SD6430とは8 m、SA6439とは7.5 m、SB6441とは10 m 離れる。



SB6441 6AHH—I 地区 (Pl. 7、Ph. 8)

十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。SB6440を東に1間延ばして建て替えた。西側溝西岸から34.5 m、北面築地南雨落溝から27.5 m に位置する。北で西へ1°30' の振れを測る。桁行4間×梁行2間で、身舎内の東から1間目の柱筋に揃う小柱穴2個を検出しており、ここに間仕切りがあった可能性がある。柱間寸法は梁行7尺、桁行の両端各1間が7尺、中央2間が6.5尺、造営尺は30.0 cm を測る。SB6436から北へ10 m 離れる。南東隅柱から南へ2.5 m(8尺)の位置から東へ延びる東西塀 SA6439がある。



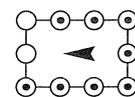
SB6445 6AHH—I 地区 (Pl. 3)

十六坪北東部の掘立柱東西棟建物。西妻から1間分を検出。西側溝西岸から西妻まで37 m、北面築地南雨落溝から6 m(20尺)に位置する。振れは微小である。桁行2間以上、梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁間とも6尺で、造営尺は30.0 cm を測る。SB6641の北18 m(60尺)に位置する。



SB6490 6AHH—G 地区 (Pl. 18、Ph. 9)

十六坪南東隅に近い掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から12.5 m、北小路北側溝から14 m に位置する。北で東へ0°25' の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁行とも6尺で、造営尺は29.4 cm を測る。

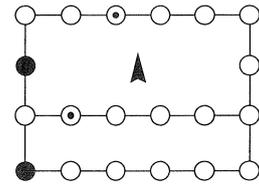


SB6500 6AHH—H 地区 (Pl. 12、Ph. 10)

十六坪南東部中央の南廂付掘立柱東西棟建物で、この時期の正殿と考える。西側溝西岸から24 m、北小路北側溝から31 m に位置する。北で東へ0°25' の振れを測る。桁行5間×梁行2間の

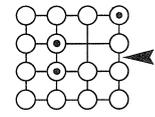
III期の正殿

身舎に南廂がつく。柱間寸法は身舎桁行8尺、梁行9尺、廂の出10尺で、造営尺は29.5 cmを測る。身舎西妻の棟通り柱穴に柱根が残り、残存長72 cm、径22 cmで、柱径8寸以上に復原される。また廂の西端柱穴の柱根は残存長42 cm、径12 cmで、柱径7寸に復原される。



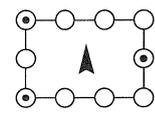
SB6562 6AHH—H 地区 (Pl. 11, Ph. 13)

十六坪南半中央部北寄りの掘立柱南北棟建物。坪東西二等分線から西1.5 m (5尺)、北小路北側溝から39 mにある。北で西へ0°40'の振れを測る。桁行3間×梁行3間で、建物内の1柱穴を欠くが、総柱の建物と考えられる。柱間寸法は桁行5.5尺、梁行5尺で、造営尺は30.0 cmを測る。SA6540から西へ1.5 m (5尺)、SA6565から南へ1.5 m (5尺)に位置する。柱穴の重複関係からSB6563より古い。



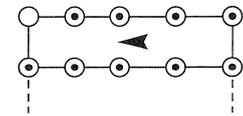
SB6567 6AHH—G 地区 (Pl. 16, Ph. 14)

十六坪南西部の掘立柱東西棟建物。SA6540から西へ12 m (40尺)、北小路北側溝から9.5 mに位置する。北で西へ0°30'の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁行とも7尺、造営尺は29.6 cmを測る。柱穴の重複関係からSA6559より新しい。



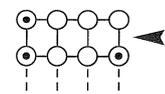
SB6599 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

発掘区の西端、十六坪南西隅の東廂付掘立柱南北棟建物で、東廂柱列と身舎東側柱列を検出した。北小路北側溝から2.5 m、SA6540からは西へ46.5 m (155尺)に位置する。北で西へ1°10'の振れを測る。桁行4間×梁行2間以上で東廂がつく。柱間寸法は桁行の南2間が10尺、北2間が8尺、廂の出は9尺で、造営尺は30.0 cmを測る。西側柱が未検出で坊間東小路との関係が不明であるが、身舎の梁行が2間で、柱間が8尺程度とすると東小路東側溝までの余地は4.5 m (15尺)となるので、片面廂であろう。柱穴の重複関係からSA6559・SK6596より新しい。身舎東側柱北から1間目の柱穴の掘形から平城宮土器II～III古が出土した。



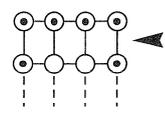
SB6602 6AHH—H 地区 (Pl. 10, Ph. 16)

発掘区の西端、十六坪南西部の掘立柱南北棟総柱建物。東側柱から1間分を検出したと考える。SA6540から西へ48 m (160尺)、北小路北側溝から23 mに位置する。振れは微小である。桁行3間×梁行2間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行6.5尺、造営尺は29.5 cmを測る。SB6605と東側柱を揃えの南3 m (10尺)の位置にある。SD6594から西へ7.5 m (25尺)、SA6582から西へ16.5 m (56尺)に位置する。3×2間の建物とすると東小路東側溝まで7 mの余地がある。



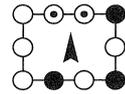
SB6605 6AHH—H 地区 (Pl. 10, Ph. 16)

発掘区の西端、十六坪南西部の掘立柱南北棟総柱建物。東側柱から1間分を検出したと考える。SA6540から西へ48 m (160尺)、北小路北側溝から31 mに位置する。北で西へ0°20'の振れを測る。桁行3間×梁行2間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行7.5尺、造営尺は30.0 cmを測る。SB6602と東側柱を揃え、北3 m (10尺)の位置にある。SD6594から西へ7.5 m (25尺)、SA6582の西16.5 m (56尺)にある。3×2間の建物とすると東小路東側溝まで6 m (20尺)の余地がある。



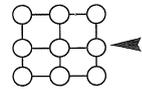
SB6620 6AHH—H 地区 (Pl. 6, Ph. 19)

十六坪北西部の坪中央に近い掘立柱東西棟建物。北面築地南雨落溝から南へ41.5 m(140尺)、坪東西二等分線から西へ1.5 m に位置する。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行6尺、造営尺は29.5 cm を測る。南東隅柱穴に残る柱根は残存長38 cm、径18 cm、復原柱径7寸以上である。北東隅の柱穴の柱根は残存長23 cm、径11 cm である。また南側柱の東から2間目にも木片化した柱根が残る。



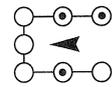
SB6628 6AHH—I 地区 (Pl. 6)

十六坪北西部の掘立柱南北棟総柱建物。北面築地雨落溝から21 m、坪二等分線から西14 m に位置する。北で西へ1°30' の振れを測る。桁行2間×梁行2間で、柱間寸法は桁行6.5尺等間だが、梁行は東間が6尺、西間が5尺である。造営尺は30.0 cm を測る。南東隅・南西隅柱穴底には長径25 cm、厚11~12 cm の河原石の礎盤石が残る。



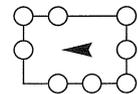
SB6639 6AHH—H 地区 (Pl. 5, Ph. 17)

十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SA6637から西へ1 m 強(4尺)に位置する。北で西へ1°40' の振れを測る。桁行2間×梁行2間であるが、南妻面棟通り柱を欠き、柱掘形小さく、柱配置も不整で、囲柵状の施設の可能性もある。柱間寸法は桁行7尺、梁行5尺ほどか。



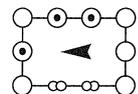
SB6646 6AHH—H・I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。北面築地雨落溝想定位置から29 m に位置する。東小路東側溝から6 m(20尺)にある。北で西へ0°30' の振れを測る。桁行3間×梁行2間だが、東側柱の南から1間目と北西隅柱を欠く。柱間寸法は桁行・梁行とも6尺で、造営尺は30.0 cm を測る。SA6637から西へ16 m、SA6641から北へ8.5 m に位置する。



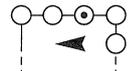
SB6651 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。北面築地雨落溝想定位置から16.5 m、東小路東側溝から21.5 m に位置する。北で東へ2°20' の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁行とも6尺であるが、西側柱中央間を7尺に広げる。この7尺間の柱の間に4.5尺の間隔で2柱を立てるのは戸口であろうか。造営尺は30.0 cm を測る。SB6647から東へ7 m(24尺)、SA6643から北へ8.5 m 離れている。柱穴の重複関係からSB6650より新しい。南東隅柱の掘形から平城宮土器Ⅲ中〜が出土した。



SB6663 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

発掘区西端、十六坪北西隅に近い掘立柱南北棟建物で、東側柱と南妻棟通り柱を検出したと考える。北面築地雨落溝想定位置から2.7 m(9尺)に位置する。桁行3間×梁行2間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行5尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係からSB6664より古い。



SA6439 6AHH—I 地区 (Pl. 7・8)

SB6441の南の掘立柱東西塀。北面築地南雨落溝から34 m にある。東で北へ1°20' の振れを測る。全長21 m を検出したが、柱間は西端2間が8尺であるほかは不揃いである。SB6441の南2.5 m、SB6636の北7.5 m にあり、両建物の東側空地を南北に区画する。

SA6509 6AHH—H 地区 (Pl. 12)

十六坪南半ほぼ中央の掘立柱南北塀。西側溝西岸から50 m、北小路北側溝から31 m に位置する。北で東へ0°50' の振れを測る。4 間の塀で、柱間寸法は7 尺であるが、南から第3～4 柱のみ6 尺に縮む。造営尺は30.0 cm を測る。SB6500から13.5 m(45尺)、SA6540から9 m(30尺)に位置する。柱穴の重複関係からSB6510より古い。

SA6540 6AHH—G・H 地区 (Pl. 11・16、Ph. 13)

坪南半を東西に二等分

十六坪南半を東西に二分する掘立柱南北塀。西側溝西岸から58 m、東面築地を想定すると56 m(190尺)に位置し、南端は北小路北側溝から2 m 離れる。20間分を検出し、北端は近現代の井戸SE6543に攪乱され、さらに北へ延びると考えられるが、第255次調査区では検出されず、未発掘部分の坪南北二等分線付近で止まると推定される。北で西へ0°25' の振れを測る。柱間寸法は7 尺を測るが、南から第5～6 柱が8 尺、第6～7 柱が5 尺、また第16～17柱が6 尺、第17～18柱が8 尺と柱間を調整する箇所があり、この部分に出入り口が設けられた可能性がある。第17柱以北は8 尺等間である。造営尺は29.5 cm を測る。SA6509とは9 m(30尺)、SB6562と1.5 m(5 尺)離れる。柱穴の重複関係からSA6548より新しい。後にSA6541に造り替えられる。

SA6565 6AHH—H 地区 (Pl. 11)

十六坪南西部、坪中心に近いSB6562の北を限る掘立柱東西塀。北小路北側溝から45.5 m に位置する。振れは微小。2 間分を検出したが、東端をSE6543に攪乱されており、もう1 間延びてSA6540に取りつく可能性もある。柱間寸法は5 尺で、造営尺は30.0 cm を測る。

SA6568 6AHH—G・H 地区 (Pl. 11・16)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。SA6540から西へ16 m、SB6567の北2.5 m(8.5尺)の位置から北へ延びる。北で東へ0°45' の振れを測る。6 間の塀で、柱間寸法は南2 間が5 尺、北4間が6.5尺、造営尺は29.7 cm を測る。

SA6582 6AHH—G・H 地区 (Pl. 10・15)

十六坪の南西部の掘立柱南北塀。SA6540から西へ31.5 m(105尺)に位置する。北で東へ0°20' の振れを測る。6 間の塀で、南端から18 m(60尺)で北小路北側溝に至る。柱間寸法は南から第2柱が未検出であるが、南3 間が10尺、北3 間が8 尺、造営尺は30.0 cm を測る。

SA6586 6AHH—H 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から38.5 m に位置する。東で北へ0°10' の振れを測る。全長14.4 m、5 間の塀であるが、柱間は7～14尺と不整である。SB6590・SB6595などと重なるが、柱穴は重複しない。

SA6603 6AHH—H 地区 (Pl. 10)

SB6602とSB6605の間をつなぐ掘立柱南北塀。SB6602北東隅柱とSB6605南東隅柱の間に1 柱を建てて設けた目隠し塀と考える。柱間寸法は南が1.3 m、北が1.6 m である。

SA6637 6AHH—H・I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西の掘立柱南北塀。坪東西二等分線から西へ31 m、東小路東側溝から27 m(90尺)に位置する。振れは微小。8 間分を検出し、南方の未発掘部分へ延びる可能性があるが、第254次調査区では検出しておらず、坪南北二等分線付近で止まると考えられる。柱間寸法は4.5～8 尺と不整である。SB6620から24 m(80尺)、SB6646から16 m(54尺)に位置する。

SA6641 6AHH—H 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。SB6646の南8.5 mにある。振れは微小。2間分を検出したが、発掘区西方へ延びる可能性がある。柱間寸法は5尺、造営尺は30.0 cmを測る。柱穴の重複関係からSD6642より新しい。

SA6643 6AHH—H・I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。北面築地雨落溝想定位置から30 m離れ、SA6637の北端に接する。振れは微小。全長7.5 m(25尺)を検出したが、東から10、15尺間隔の3柱穴の掘形が大きく西側15尺の間に小穴3個が並ぶ。SB6639の北8.5 mに位置する。

SA6662 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。北面築地雨落溝想定位置から4 mに位置する。北で西へ2°30'の振れを測る。3間の塀だが、柱間寸法は5～9尺と不整である。

SD6594 6AHH—G・H 地区 (Pl. 10、Ph. 22)

十六坪南西部の南北素掘溝。東小路東側溝から18 m(60尺)、SB6602・SB6605の東7.5 m(25尺)、SA6582の西9 m(30尺)にある。幅25～50 cmでわずかに蛇行する。南端は北小路北側溝の北20 mで途切れており、敷地内の排水の用はなさない。地割溝とも考えられるが坪を整数等分するような位置ではなく、性格は不明である。柱穴などとの重複関係からSB6585より新しく、SA6589・SB6595より古い。

SD6609 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

坪東西二等分線の西32 mに位置する南北素掘溝。SK6574の西1 mにある。南北の長さ9 m、幅0.4～1.1 mで、七条条間北小路北側溝に注ぐ。宝珠硯片が出土した。

SE6432 6AHH—H 地区 (Pl. 8・19、Ph. 23)

十六坪北東部の井戸。西側溝西岸の西12.5 m、北築地雨落溝から46.5 mにある。SB6536から東へ22 m、SD6430の延長線からは北へ6 mに位置する。掘形は直径4 m、深1.6 mで、一辺84 cmの縦板組井戸枠が残る。四隅に5 cm角ほどの支柱を立て、横棧2～3段をあてがって縦板を支持する構造である。縦板は幅15 cmほどで一辺に7～9枚用い、板の重ねを大きくとっている。掘形から平城宮土器II、枠内から平城宮土器II～IIIが出土した。

縦板組の井戸

SK6578 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

十六坪南西部の南北に長い不整形土坑で南北4.3 m、東西1.5 m。SA6540から32.5 m、北小路北側溝から4.5 mに位置する。SB6575より新しく、奈良中頃の土器が出土しており、745年平城還都直後の土坑と考える。

SK6579 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

十六坪南西部のSB6580と重複する南北に長い不整形土坑。坪東西二等分線から34 m、北小路北側溝から7 mに位置し、SA6552の西2.5 mにある。南北13.3 m、東西4.3 mである。土坑内北端に一段深いSK6581があり、これがあふれたものであろうか。柱穴の重複関係からSA6559・SB6580・SB6585より新しい。平城宮土器III古が出土した。

SK6581 6AHH—G 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部のSB6585の東南隅柱と重複する隅丸方形土坑。東小路東側溝から22 m、北小路北側溝から19 mに位置する。SK6579の北端の一段深くなった部分で、南北1.6 m、東西2.7 m。

SA6582の西3m(10尺)に位置する。SB6585より新しい。

SX6475 6AHH-G 地区 (Pl. 17)

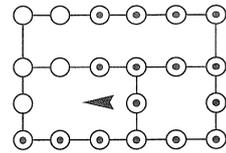
南辺の門 十六坪南辺の中央東寄りで検出した東西に並ぶ2柱穴で、七条条間北小路から坪南東部への門と推定する。西側溝SD6400西岸から45m、北小路北側溝SD6472北岸から1.5mに位置する。柱間寸法は10尺で、造営尺は29.5cmを測る。これを南面築地に開く門とすると、築地の基底幅は条間北小路との間隔からみて6~7尺程度になる。

d IV期の遺構

SB6510 6AHH-H 地区 (Pl. 12, Ph. 10)

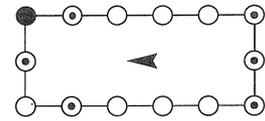
SB6500の
脇 殿

十六坪南東部の東廂付掘立柱南北棟建物。SA6509を廃して造営しており、南妻をSB6500の南廂に揃える。身舎東側柱がSA6509の柱位置を踏襲する。西側溝西岸から46.5m、北小路北側溝から31mに位置する。北で西へ0°40'振れを測る。桁行5間×梁行2間で、東廂がつく。身舎の南から2間目の棟通りに柱穴があり、ここで南北に間仕切った可能性がある。柱間寸法は梁行が6.5尺、桁行は南2間が7尺等間、北3間は6.5尺で、北から2間目のみ7尺、廂の出は9.5尺、造営尺は29.7cmを測る。SB6500西妻から10.5m(35尺)、後出SB6550東側柱から3.5m(12尺)に位置する。



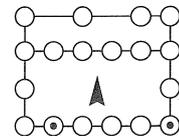
SB6550 6AHH-H 地区 (Pl. 11)

十六坪南半の中央にある掘立柱南北棟建物。西側溝西岸から57m、北小路北側溝から28.5mに位置する。SA6541に造り替えた際、その北端に建てられた。SA6541の柱通りから東へ1.5m(5尺)が東側柱通りである。北で東へ1°00'の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁間とも8尺、造営尺は30.0cmを測る。SB6510から西へ3.5m(12尺)に位置する。



SB6590 6AHH-H 地区 (Pl. 10, Ph. 15)

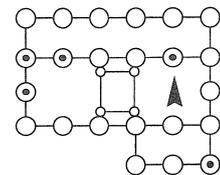
十六坪南西部の北廂付掘立柱東西棟建物。北小路北側溝から32m、東小路東側溝から25mに位置する。北で東へ2°10'の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、北に廂がつくが廂の東から3・5柱めを欠く。廂の柱掘形は身舎のものよりかなり小さく、屋内化されない土縁様の構造であろう。柱間寸法は桁行5尺、梁行6.5尺、廂の出は6尺で、造営尺は30.5cmを測る。SB6591とは東妻を揃え、身舎南側柱どうしで9m(30尺)離れる。またSB6600から北3m(9尺)に位置する。柱穴の重複関係からSA6576より新しく、SB6595より古い。



SB6591 6AHH-H 地区 (Pl. 10, Ph. 15)

倉庫状建物

十六坪南西部の掘立柱東西棟建物で南北に廂がつく。建物内に甕の据付穴SX6593があり、倉庫と考える。身舎中央に方形に並ぶ4本柱SX6592を検出している。北小路北側溝から41mで身舎南側柱、東小路東側溝から23mに位置する。北で東へ2°20'の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、北側には桁行全長、南側には東から2間分の廂がつく。柱間寸法は桁行6.5尺、梁行6尺、廂の出は北・南とも7尺で、造営尺は30.0cmを測る。柱穴の重複関係からSB6595より古い。



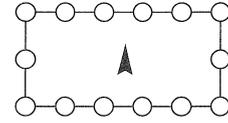
身舎北東隅の柱穴掘形から平城宮土器Vが出土した。

SX6592 6AHH—H 地区 (Pl. 10)

SB6591内に方形に並ぶ掘立柱穴4基。SB6591の身舎の中心にあり1間四方で、柱間寸法は身舎桁行方向6尺、身舎梁行方向7尺、造営尺は30.0cmを測る。性格は不明だが、建物の構造材ではなく、架台様の施設であろうか。

SB6600 6AHH—H 地区 (Pl. 10・11, Ph. 15)

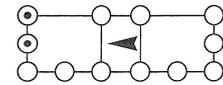
十六坪南西部ほぼ中央の掘立柱東西棟建物。北小路北側溝から23.5 m、東小路東側溝から30.5 mに位置する。坪東西二等分線から17.5 mに位置する。北で東へ2°20'の振れを測る。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行7尺、梁行8.5尺、造営尺は29.5 cmを測る。前出SB6590の南7.2 m(24尺)に位置する。後に柱抜き取り穴を利用してSB6601に建て替えられる。



南西部の中心建物

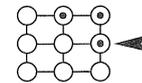
SB6623 6AHH—H・I 地区 (Pl. 6)

十六坪北西部の掘立柱南北棟建物。SD6430の北12 m(40尺)、坪東西二等分線の西15 m(50尺)で西側柱通り。北で西へ0°30'の振れを測る。桁行5間×梁行2間だが、東側柱の南から第2・5柱を欠く。柱間寸法は桁行は6.5尺であるが、中央間のみ7尺、梁行は5.5尺で、造営尺は30.0 cmを測る。SB6635から27 m(90尺)に位置する。



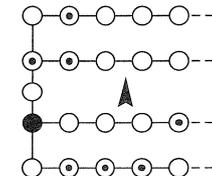
SB6626 6AHH—I 地区 (Pl. 6, Ph. 19)

十六坪北西部の掘立柱南北棟総柱建物。北面築地雨落溝から22 m、坪東西二等分線から4.5 m(15尺)に位置する。振れは微小。桁行2間×梁行2間で、柱間寸法は桁行6.5尺、梁行5尺、造営尺は30.0 cmを測る。SA6667の南3 m(10尺)、SB6623から北へ5.5 m(18尺)、東へ4.5 m(15尺)に位置する。



SB6630 6AHH—I 地区 (Pl. 6, Ph. 18)

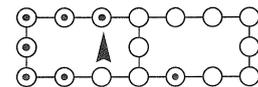
十六坪の北辺ほぼ中央にある掘立柱東西棟建物で、南北2面に廂がつく。西妻から4間分を検出した。北面築地南雨落溝から1 m、東小路東側溝から56 mに位置する。坪東西二等分線は西妻から2柱目付近を通る。振れは微小である。桁行5間以上×梁行2間であるが、第252次調査区では検出されていないので、桁行は8間以下である。柱間寸法は桁行6.5尺、梁行5.5尺、廂の出は南・北とも8尺で、造営尺は30.0 cmを測る。身舎南西隅柱穴に柱根が残る。残存長25 cm、径10 cmで復原柱径は7寸以上である。



坪北半の中心建物

SB6635 6AHH—I 地区 (Pl. 6, Ph. 18)

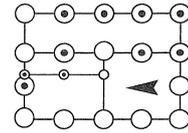
十六坪北辺に近い掘立柱東西棟建物で、北側柱をSB6630の北廂柱に揃え、4 m強(14.5尺)離れる。北面築地南雨落溝から南側柱まで4.5 m(15尺)、東小路東側溝から40 mに位置する。振れは微小である。桁行6間×梁行2間で、柱間寸法は桁行6.5尺等間、梁行は全長10.5尺を二分する。造営尺は30.0 cmを測る。SA6667から北側柱まで18 m(60尺)ある。



SB6640 6AHH—H・I 地区 (Pl. 5, Ph. 17)

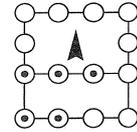
十六坪北西部の東廂付掘立柱南北棟建物。北面築地南雨落溝から33.5 m、東小路東側溝から27 m、坪東西二等分線から25 mに位置する。振れは微小である。桁行4間×梁行2間で、東廂

がつく。柱間寸法は桁行の南2間が6.5尺、北2間が7尺、梁行は6尺、廂の出が7尺で、造営尺は29.5 cmを測る。身舎の北半2間では、身舎東側柱通から西へ4尺の位置に小柱穴が並び、間仕切りあるいは床東とも考えられるが、性格は不明である。身舎東側柱からSB6623まで12 m(40尺)、SB6645まで9 m(30尺)離れる。



SB6645 6AHH—H・I地区 (Pl. 5、Ph. 20)

十六坪北西部の小規模な掘立柱東西棟建物であるが、南側に廂がつく。北面築地雨落溝想定位置から28.5 m、東小路東側溝から13.5 mに位置する。北で東へ1°30'の振れを測る。桁行3間×梁行2間に南廂つきで、柱間寸法は桁行6尺、梁行5.5尺、廂の出8尺、造営尺は29.5 cmを測る。



南半を東西
二等分

SA6541 6AHH—G・H地区 (Pl. 11・16、Ph. 13)

十六坪南半を東西に二分する掘立柱南北塀で、SA6540を柱間半分ずらして造り替えたもの。南端は北小路北側溝から1 m、北端はSB6550南妻に接する。北で東へ0°15'の振れを測る。全長27 m(90尺)、12間の塀である。柱間寸法は8尺であるが、南から2～3柱で7尺、3～5柱で6.5尺、また8～9柱で6尺と柱間を調整しており、この部分に出入り口を設けた可能性がある。造営尺は30.0 cmを測る。

SA6545 6AHH—H地区 (Pl. 11)

十六坪南東部の坪中央に近い掘立柱南北塀で、SB6510の北西隅柱の北1.9 m(6.5尺)から北へ延びる。2間分を検出し、北へ続くと考えられるが、第255次調査区では検出されず、未発掘部分の坪南北二等分線付近で止まるらしい。後出SA6551との間隔は3 m強(11尺)で、この間を通路としたものか。西側溝西岸から53.5 m、北小路北側溝から43 mに位置し、北で東へ0°35'の振れを測る。柱間寸法は南から6.5・7尺で、造営尺は30.0 cmを測る。

SA6551 6AHH—H地区 (Pl. 11)

十六坪南東部の坪中央に近い掘立柱南北塀で、SB6550の北東隅柱の北2.4 m(8尺)から北へ延びる。2間分を検出し、さらに北へ続くと考えられるが、SA6545と同様に坪南北二等分線付近で止まるらしい。SA6545との間を通路としたものであろうか。西側溝西岸から57 m、北小路北側溝から43 mに位置し、北で東へ1°弱の振れを測る。柱間寸法は5.5尺、造営尺は30.0 cmを測る。

SA6588 6AHH—H地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。SB6591の西妻から2.3 m(7.5尺)、SB6590の西妻から4.5 m(15尺)に位置する。北で東へ2°20'の振れを測る。全長5.2 m、3間の塀と推定されるが、南から1間目の柱穴を欠く。柱間は不揃いである。

SA6624 6AHH—H・I地区 (Pl. 6)

SB6623の東にある掘立柱南北塀で、SB6623の目隠し塀と考える。南端がSB6623の南妻と揃い、東へ2.7 m(9尺)に位置し、北で西へ0°30'の振れを測る。3間の塀で、全長9 m。

SA6667 6AHH—I地区 (Pl. 6)

十六坪北西の掘立柱東西塀。SD6430の北34 m(115尺)に位置する。東で北へ0°30'の振れを測る。4間の塀で、全長11.4 m(38尺)である。SB6623から12 m(40尺)、SB6635から15 m(50尺)、SB6626から3 m(10尺)離れる。

SA6670 6AHH-I 地区 (Pl. 6)

SB6630の北廂西端柱とSB6535の北東隅柱の間に東西に並ぶ掘立柱穴2基。北面築地南雨落溝から1.2m(4尺)に位置する。柱間寸法は6尺、造営尺は30.0cmを測る。振れは微小である。SB6630とSB6535の間を繋ぐ目隠し塀と考えられるが、SB6630とSB6535の間隔14.5尺の二等分線が柱間の中央を通っており、扉口としていた可能性もある。

SD6431 6AHH-H 地区 (Pl. 7)

十六坪北東部のロ字状の素掘溝。南北3.3m、南北は南辺8.5m、北辺7.7mで、溝幅15~50cm、深3cmである。SB6436の南2mにあり、これに伴う菜園等の外周溝であろうか。平城宮土器IV新〜が出土した。

SE6561 6AHH-G 地区 (Pl. 16・19, Ph. 23)

十六坪南西部の井戸。SA6541から西へ9m、北小路北側溝から16.5mに位置する。掘形は南北2.7m、東西3.0m、残存深さ2.0mである。ヒノキの刳抜井戸枠が残り、直径80cm、残存長183cm、厚3~4cm。下端から7cmほどを斜めに削り落とす。上端から75cmが風化する。井戸底は自然木を含む灰色砂、裏込土は灰緑色粘混灰白色砂である。裏込から平城宮土器V、井戸枠内から平城宮土器V~VIIが出土し、奈良時代末から平安時代初頃まで使われた。

刳 抜 井 戸

SE6657 6AHH-I 地区 (Pl. 5・19, Ph. 23)

十六坪北西部の井戸。北面築地南雨落溝想定位置から10m、東小路東側溝から18mに位置し、SB6645からは北へ18.5m(60尺)離れる。掘形は東西2.5m、南北2.4m、残存深2.7mである。縦板・木箱・曲物を組み合わせた井戸枠が残る。最下部は底板を抜いた曲物で、径55cm、高さ42cm、厚さ0.5cmである。この上に一辺60cm、高さ40cmの方形の木製枳を、やはり底を抜いて載せている。板厚1.2cmで、四隅は三枚組としている。最上部は平面が正方形の縦板組で一辺65cm、残存高さ1.6m。四隅の柱に横棧2段をほぞ差しにし、幅18cmほどの縦板を一辺に4~5枚立て込む。四隅の柱材には、井戸の棧とは関係のないほぞ穴や欠き込みがあり、転用材の可能性ある。井戸枠内埋土から平城宮土器IV~V、井戸枠抜取穴から平城宮土器Vが出土した。奈良時代末に掘られ、平安時代初めには廃絶した井戸である。

縦板・木箱
・曲物を組
み合わせた
井 戸

SK6577 6AHH-G 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の不整形土坑。坪東西二等分線の西24~30m、北小路北側溝から18mに位置する。南北4.5m、東西6.4mで、平城宮土器III新~IVが出土した。

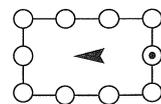
SX6593 6AHH-H 地区 (Pl. 10)

SB6591内の浅い土坑6基。甕を据えた穴か。直径0.7~1.0m、残存深さは15~20cmである。遺構の重複関係からSX6592より古い穴もある。

e V期の遺構

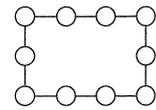
SB6502 6AHH-H 地区 (Pl. 12, Ph. 10)

十六坪南東部の掘立柱南北棟建物で、西側溝西岸から38m、北小路北側溝から38mに位置する。北で東1°25'の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行7.5尺、梁行6.5尺、造営尺は30.0cmを測る。北妻を後出のSB6505の南側柱と揃えて坪南北八等分線近くに置き、SB6505の西4.5m(15尺)にある。



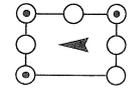
SB6505 6AHH—H 地区 (Pl. 12、Ph. 10)

十六坪南東部の掘立柱東西棟建物。西側溝西岸から27 m、北小路北側溝から45 m に位置する。北で東へ $1^{\circ}30'$ の振れを測る。桁行3間×梁行2間で、柱間寸法は桁行・梁行とも7尺、造営尺は30.0 cm を測る。SB6502の北東隅柱から東へ4.5 m(15尺)に南西隅柱が位置する。柱穴の重複関係から SA6506より古い。



SB6563 6AHH—H 地区 (Pl. 11、Ph. 13)

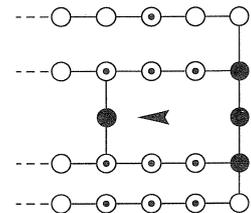
十六坪南西部の坪中心に近い掘立柱南北棟建物。北で東へ $3^{\circ}30'$ と比較的大きな振れを測る。桁行2間×梁行2間だが、西側柱通中央柱穴を欠き、西側の開いたコ字形の囲いの可能性もある。柱間寸法は桁行が8尺、梁行が5.5尺、造営尺は29.7 cm を測る。SB6595の東24.5 m、SB6591の東20 m、SA6598の東47.5 m(140尺)にある。柱穴の重複関係から SB6562より新しい。



SB6595 6AHH—H 地区 (Pl. 10、Ph. 15)

V期の中心
建 物

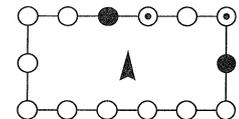
十六坪南西部の東西2面廂つきの掘立柱南北棟建物で、南妻から4間分を検出した。北小路北側溝から36.5 m に位置する。北で東へ $3^{\circ}30'$ と比較的大きな振れを測る。桁行5間以上×梁行2間で、東西に廂がつく。身舎の棟通り南から3間目に柱穴があり、ここに間仕切りがあった可能性がある。柱間寸法は桁行7.5尺、梁行8尺、廂の出は東9.5尺、西7尺で、造営尺は30.5 cm を測る。身舎の南妻の3柱穴と、棟通り間仕切り位置に柱根が残る。身舎南西隅の柱根は残存径18 cm、残存長50 cm で復原柱径8寸以上。身舎南妻棟通りの柱根は残存径10 cm、残存長22 cm、復原柱径7寸以上である。SA6598の東8 m(26尺)に位置する。柱穴の重複関係から SB6590・SB6591・SD6594より新しい。



SB6601 6AHH—H 地区 (Pl. 10・11、Ph. 15)

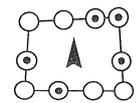
SB6600の
建て替え

十六坪南西部の北西隅に近い掘立柱東西棟総柱建物で、SB6600の柱抜き取り穴を利用して同規模で建て替える。北小路北側溝から23.5 m、坪東西二等分線から17.5 m に位置する。北で東へ $1^{\circ}20'$ と SB6600より振れは少し小さい。桁行5間×梁行2間で、柱間寸法は桁行7尺、梁間8.5尺、造営尺は29.5 cm を測る。SB6590南側柱から南へ7.2 m(24尺)に北側柱通りが位置する。東妻棟通り柱穴に残る柱根は残存長72 cm、径25 cm で、復原柱径9寸、北側柱西から3柱目の柱根は残存長40 cm、径10 cm である。北東隅柱の抜取穴から平城宮土器IV～Vが出土した。



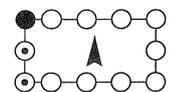
SB6661 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西隅に近い掘立柱東西棟建物。北面築地南雨落溝想定位置から6 m、東小路東側溝から21.5 m に位置する。柱位置の歪みが極めて大きい建物とした。桁行3間×梁行2間を想定する。柱間寸法は桁行の南面は6尺等間であるが、北面は東から4.5、5.5、6尺と不揃いである。梁行は東面が南から5尺、8尺、西面が5尺、7尺を測る。振れも測り難いが、南側柱では東で南へ $1^{\circ}00'$ 振っている。



SB6665 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北辺西寄りの掘立柱東西棟建物。北面築地南雨落溝想定位置に接し、東小路東側溝から27 m に位置する。北で東へ $2^{\circ}30'$ の振れを測る。桁行4間×梁



行 2 間で、柱間寸法は梁行5.5尺、桁行は 6 尺で東端間のみ4.5尺に縮む。造営尺は30.0 cm。SB6666と重なるが柱穴の重複はない。柱穴から土師器甕が出土した。

SA6501 6AHH—H 地区 (Pl. 12)

十六坪南東部、SB6502の南の目隠しになる 4 間の掘立柱東西塀。SB6502南妻から2.7 m(9 尺)離れる。北で東へ1°25'の振れを測る。全長3.9 m(13尺)で、中間の柱穴は小さい。

SA6572 6AHH—G 地区 (Pl. 10・16)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。坪東西二等分線の西22 m に位置し、SB6601の南 2 m(6 尺)から南へ延び、北小路北側溝の北10 m に達する。北で東へ1°20'の振れを測る。4 間の塀で、柱間寸法は10尺、造営尺は29.5 cm を測る。柱穴の重複関係から SB6575より新しい。

SA6598 6AHH—G・H 地区 (Pl. 10・15)

十六坪南半の西端に近い掘立柱南北塀。全長41 m、16間分を検出した。北の未発掘部分へ延びる可能性があるが、第255次発掘区では検出しておらず、坪南北二等分線付近で止まるものとする。柱間寸法は 8 尺または 9 尺であるが、南から第 3～6 柱で6.5、7.5、7.5尺と縮み、第 13～14柱で、12尺に延びる。造営尺は30.0 cm を測る。北で東へ3°30'の振れを測る。SB6590の西15 m(50尺)、SB6595の西 8 m に位置する。SA6597・SB6606より古い。

坪西辺の閉塞施設

SK6574 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

十六坪南西部の不整形土坑。南北4.0 m、東西7.9 m で、坪東西二等分線から西23.5 m、北小路北側溝から 2 m 離れる。奈良時代末期の土器を出土する。

SK6608 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

十六坪南西部の土坑。南北1.1 m、東西0.7 m で、坪東西二等分線から西25.5 m、北小路北側溝から0.5 m 離れる。平城宮土器Vが出土した。

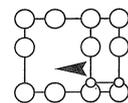
SK6656 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の土坑。東小路東側溝から24 m、北面築地南雨落溝想定位置から12 m に位置する。SE6657の東南3.5 m 離れる。東西4.5 m、南北2.9 m、残存深さ20 cm。多量の平城宮土器IV～Vが出土した。

f VI期の遺構

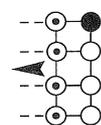
SB6427 6AHH—H 地区 (Pl. 12)

十六坪南東、坪中心に近い掘立柱南北棟建物。東一坊大路西側溝から42.5 m、北小路北側溝から48 m に位置する。北で東へ1°30'の振れを測る。桁行 3 間、梁行 2 間であるが、桁行が 5、6、5 尺、梁行が東から 5、8 尺と不整である。造営尺は30.0 cm を測る。柱穴は小さい。南から 1 間目、東から 1 間目に柱穴があり、南から 1 間を間仕切りしたものか。同じく西側柱の南端間では側柱から 2 尺内側に 2 小穴を検出しているが、性格は不明である。小規模な建物にもかかわらず、複雑な平面形をもつ。



SB6606 6AHH—H 地区 (Pl. 10, Ph. 16)

十六坪の西辺中央の掘立柱建物で、東西棟総柱建物の南から 1 間分を検出したと考える。北小路北側溝から45 m、東小路東側溝から10 m に位置する。北で西へ0°40'の振れを測る。桁行 3 間×梁行 1 間以上で、柱間寸法は桁行5.5尺、梁行 6 尺、造営



尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SA6598より新しい。

SB6664 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西隅の掘立柱東西棟建物で、東妻から1間分を検出したと考える。北面築地雨落溝想定位置に接し、東小路東側溝から東妻まで17 m。桁行2間以上×梁行2間で、柱間寸法は桁行6尺、梁行6.5尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SB6663より新しい。



SA6503 6AHH—H 地区 (Pl. 12)

十六坪南東部の掘立柱東西塀。西側溝西岸から28 m、北小路北側溝から49 m に位置する。東で南へ2°45′の振れを測る。5間の塀で、柱間寸法は6尺、造営尺は30.0 cm を測る。北へ5.5 m (18尺)に SA6506があるが、東へ1間分ずれる。2条の塀の間を通路としたものか。

SA6506 6AHH—H 地区 (Pl. 12、Ph. 10)

十六坪南東の掘立柱東西塀で SA6503と平行する。北小路北側溝から44 m に位置し、東端から西側溝西岸まで25.5 m ある。東で南へ2°25′の振れを測る。5間の塀で、柱間寸法は6尺、造営尺は30.0 cm を測る。SA6503の北5.5 m (18尺)にあり、東へ1間分ずれる。

SA6597 6AHH—G・H 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。東小路東側溝から10 m に位置する。北で西へ3°50′の振れを測る。3間の塀で、柱間寸法は5尺、造営尺は29.5 cm を測る。SA6598より新しい。

g 中・近世の遺構

SE6478 6AHH—G 地区 (Pl. 17・19)

十六坪南東部の坪南辺に近い井戸。西側溝西岸から27 m、北小路北側溝から4 m に位置する。掘形は北西角が北へ、南東角が南へ延びた平行四辺形で、東西1.35 m、南北1.4 m、残存深さ90 cm。遺構面から30 cm 下で2段掘りになっており、以下は直径1 m ほどの円形となる。底は灰白色砂、井筒などは残存しておらず、埋土は黄灰色粘土混じりの青灰色粘質土である。底から中世の瓦器が出土した。

SE6479 6AHH—G 地区 (Pl. 18)

十六坪南東隅に近い方形土坑。西側溝西岸から6 m、北小路北側溝から9 m に位置する。掘形は隅丸方形で、南北1.6 m、東西1.6 m、残存深さ82 cm である。底は黄灰色荒砂、埋土は灰色粘土と黄灰色砂が混交する。湧水のない砂層に達して断念された井戸と考える。

SE6489 6AHH—G 地区 (Pl. 18)

十六坪南東隅に近い方形土坑。西側溝西岸から11 m、北小路北側溝から12.5 m に位置する。掘形は南西隅が北へ縮んだ方形で、東西2.15 m、南北2.15 m、残存深さ135 cm。遺構面から50 cm 下がって2段掘りとなり、以下は東西1.4 m、南北1.35 m の円形掘形となる。底は灰色砂、埋土は段掘以下が青灰粘土。上層が灰褐色砂質土と黄褐色粘質土が混交する。湧水のない砂層に達して断念された井戸と考える。遺物はないが中世の遺構であろう。

SE6658 6AHH—I 地区 (Pl. 5、Ph. 20)

十六坪北西部の井戸。東小路東側溝から30 m、北面築地雨落溝想定位置から11 m に位置する。SB6660内部で検出した。掘形は東西2.5 m、南北2.5 m の方形で、埋土に瓦器を含む。

h 時期不明の遺構

SA6424 6AHH—H 地区 (Pl. 13)

十六坪南東部の掘立柱南北塀。西側溝西岸から21 m に位置する。北で東へ2°00' の振れを測る。全長10 m、7 間の塀で、柱間寸法は5.5~8 尺と不揃いである。柱穴掘形は小さい。耕作に伴う遺構の可能性もある。

SA6564 6AHH—H 地区 (Pl. 11)

十六坪南西部の坪中心に近い掘立柱東西塀。北小路北側溝から42 m に位置する。振れは微小。2 間分を検出した。柱間寸法は東から5 尺、7 尺で、造営尺は29.5 cm を測る。SB6562・SB6563 と重なり、SB6562より新しいが、SB6563との新旧関係は不明。掘形小さく、耕作に伴う遺構の可能性もある。

SA6573 6AHH—G 地区 (Pl. 11)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。北で西へ5°50' と極めて大きい振れを測る。3 間の塀で柱間寸法は8 尺、造営尺は30.0 cm を測る。南から2 柱目に柱根が残り、残存長21 cm、径6 cm、復原柱径は粘質土の範囲から見て12 cm 程度か。

SA6583 6AHH—H 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から35 m、東小路東側溝から21 m に位置する。東で北へ0°20' の振れを測る。3 間の塀で、柱間寸法は7 尺、造営尺は30.0 cm を測る。柱穴の重複関係から SA6584より新しいが、時期は決め難い。

SA6584 6AHH—H 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱東西塀。北小路北側溝から35 m に位置する。東で北へ2°00' の振れを測る。3 間分を検出し、柱間寸法は9 尺、造営尺は29.5 cm を測る。SB6585の北10 m(35尺)にある。柱穴の重複関係から SA6583より古いが、時期は決め難い。

SA6587 6AHH—H 地区 (Pl. 10)

十六坪南西部の掘立柱南北塀。北で西へ2°50' の振れを測る。2 間の塀で、柱間寸法は8 尺等間、造営尺は30.0 cm を測る。SA6586・SB6595と重なるが、新旧関係は不明。

SA6638 6AHH—H 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱南北塀。北で東へ3°20' の振れを測る。2 間の塀で、柱間寸法は7 尺、造営尺は29.5 cm を測る。SB6640と重なるが柱穴は重複しない。振れが耕作溝と一致し、耕作関連の可能性が大きい。

SA6648 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。東で南へ2°20' の振れを測る。5 間の塀で、柱間寸法は中央3 間が7.5尺、両端間が6.5尺。振れは耕作溝と直交しており、耕作関連の可能性が大きい。

SA6654 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の掘立柱東西塀。東で南へ2°00' の振れを測る。2 間の塀で、柱間寸法は5.5尺、造営尺は30.0 cm を測る。振れは耕作溝と直交しており、耕作関連の可能性が大きい。

SD6476 6AHH—G 地区 (Pl. 16・17)

十六坪南辺中央付近の東西素掘溝。北小路北側溝から1.5 m に位置する。SX6475から西へ24

mの間で断続して検出した。幅30 cm 前後で SA6541より新しい。十六坪南面の区画施設に伴う溝とも考えられるが、耕作関連の溝の可能性もある。

SD6477 6AHH—G 地区 (Pl. 18)

十六坪南辺に近い東西素掘溝。東一坊大路西側溝から9 m、北小路北側溝から3.5 mに位置する。東西長さ8.5 m、幅0.5~1.2 m、残存深さ46 cm。東端の浅くなった部分で漆器片が出土した。十六坪南辺を区画する土塁または築地の土取り穴の可能性もある。

SD6494 6AHH—G 地区 (Pl. 17・18)

十六坪南辺のSD6477の西に続くごく浅い東西溝。北小路北側溝の北4 mにある。東西4.8 m、幅70 cm 前後で、残存深さ10 cm。SD6477同様、南面区画施設の土取り溝の可能性もある。

SD6632 6AHH—I 地区 (Pl. 6)

十六坪北東部のSB6630と重複する斜行溝。幅約40 cm、長さ3.9 mで、SB6630より古い。

SE6529 6AHH—G 地区 (Pl. 15)

七条条間北小路路面上の井戸。小路交差点から東へ18 m、北小路の北寄りにある。掘形は南北1.7 m、東西1.7 mの方形で、残存深さ126 cm、遺構面より1.0 m下がって2段掘とし、以下は長径80 cm 短径61 cmの楕円形の掘形となる。

SK6434 6AHH—H 地区 (Pl. 8)

十六坪東辺中央付近の隅丸方形土坑。西側溝西岸から9 m、北面築地南側溝から42 mに位置し、SE6432から東へ3.5 m、北へ4.5 mにある。掘形は隅丸方形で、東西1.7 m、南北2.0 m、残存深75 cm。底は灰色細砂、埋土は底から55 cmが黒灰色粘土混青灰色シルト、その上は黄灰色粘質土である。掘形の法面は急角度で、途中で断念した井戸か。出土土器は時期不明。

SK6474 6AHH—G 地区 (Pl. 18)

七条条間北小路北側溝SD6472を切る隅丸方形土坑。西側溝SD6400西岸から17 mに位置する。条間北小路北側溝の北岸から溝内にかけて、東西1.1 m、南北1.1 m、残存深さ80 cm。途中で断念した井戸であろうか。

SK6481 6AHH—G 地区 (Pl. 18)

十六坪東辺南寄りの南北に長い土坑。西側溝西岸から4 m、北小路北側溝から北へ12 mに位置する。南北3.85 m、東西1.3 m、残存深さ45 cm。法面は急角度である。須恵器が出土したが時期は不明である。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6482 6AHH—G 地区 (Pl. 18)

十六坪東辺南寄りの南北に長い不整形土坑。西側溝西岸から4 m、SK6482の北2 mに位置する。東西1.6 m、南北2.7 m、残存深さ30 cmで、法面は急角度である。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6483 6AHH—G・H 地区 (Pl. 13)

十六坪南東部の方形土坑。西側溝西岸から5 m、北小路北側溝から23.5 mに位置する。南北2.0 m、東西1.8 m、残存深さ70 cm。底は茶褐色粘土で井戸にはならない。埋土は灰褐色粘質土塊を含む黄灰色粘質土である。瓦・土器が少量出土したが、時期は不明である。

SK6486 6AHH—G 地区 (Pl. 18)

十六坪東辺南寄り、SK6481の北西の南北に長い不整形土坑。西側溝西岸から6 m、北小路北

側溝から14 m に位置する。南北4.6 m、東西1.5 m、残存深さ50 cm。法面は急角度である。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6487 6AHH—G 地区 (Pl. 13)

十六坪東辺南寄り、SK6481とSK6483の間をつなぐ形で検出された南北に長い不整形土坑。西側溝西岸から6 m に位置する。南北4.2 m、東西1.0 m、深さ35 cm。東辺を区画する築地の土取り穴の可能性もある。

SK6488 6AHH—H 地区 (Pl. 13)

十六坪東辺南寄り、SK6483の北西にある円形土坑。西側溝西岸から6 m、北小路北側溝から25 m に位置する。南北1.0 m、東西1.0 m で、拳大の礫が多数投入されている。性格不明。

SK6491 6AHH—G 地区 (Pl. 17)

十六坪南東部の不整形土坑。西側溝西岸から27 m、北小路北側溝から18 m に位置する。南北2.5 m、東西2.7 m、残存深さ40 cm 以上で大ききの割に浅い。

SK6492 6AHH—G・H 地区 (Pl. 12)

十六坪南東部の方形土坑。SB6495の西2 m にあり、西側溝西岸から24 m、北小路北側溝から23 m に位置する。掘形は南北1.7 m、東西1.9 m、残存深さ78 cm。底は自然木を含む黒灰色砂質土、埋土は黒色土塊と白色砂塊を含む灰色粘質土である。未完掘の井戸であろうか。

SK6493 6AHH—H 地区 (Pl. 13)

十六坪南東部SB6495の北方5 m にある炭と土器を含むごく浅い方形土坑。西側溝西岸から13 m、北小路北側溝から33 m に位置する。南北1.0 m、東西1.4 m、残存深さ16 cm。

SK6552 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

十六坪南辺に近い不整形土坑。北小路北側溝から5 m に位置する。南北3.6 m、東西2.8 m。土器の時期は不明である。

SK6554 6AHH—G 地区 (Pl. 16)

十六坪南西部のSK6553とSK6557の間にある不整形土坑。南北1.5 m、東西1.1 m でSK6553・SK6557より新しい。土器の時期は不明である。

SK6569 6AHH—G 地区 (Pl. 11)

十六坪南西部の不整形土坑。坪東西二等分線の西12 m。南北4.1 m、東西1.8 m。

SK6622 6AHH—H 地区 (Pl. 6)

十六坪北西部のSB6620西妻棟通柱に切られる不整形土坑。南北1.1 m、東西1.1 m、残存深さ25 cm である。SD6621より新しく、SB6620より古いだが、時期は決め難い。

SK6627 6AHH—I 地区 (Pl. 6)

十六坪北西部のSB6625の北の土坑。東西1.2 m、南北0.9 m 以上。

SK6629 6AHH—I 地区 (Pl. 6)

十六坪北半の中央に近い砂混じり大土坑。南北2.6 m、東西1.9 m。

SK6636 6AHH—I 地区 (Pl. 6)

十六坪北西部の築地南雨落溝SD6446を攪乱する土坑。東西2.2 m、南北1 m 以上。

SK6659 6AHH—I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部のSB6660南東隅を攪乱する土坑。東西3.8 m、南北1.8 m。

C 祭祀関連その他の遺構

i 奈良時代の祭祀関連遺構

SX6448 6AHD-A 地区 (Pl. 3, Fig. 15, Ph. 24)

六条大路上の土器埋納坑

六条大路上の土器埋納遺構。六条大路と東一坊大路の交差点から西へ55 m、六条大路北側溝南岸から1.5 mにある。掘形は南北93 cm、東西50 cmの長円形で、残存深さ25 cm。奈良時代後半の甕2個を合口に横たえ、主軸を南北に埋納する。上半が削平され、甕の下半分が残る。

SX6460 6AHG-P 地区 (Pl. 18, Fig. 15, Ph. 24)

東一坊大路上の土器埋納坑

東一坊大路 SF6410路面上の西側溝寄りにある土器埋納遺構。七条条間北小路との交差点から北へ6 mに位置する。掘形は南北99 cm、東西61 cmの長円形で、残存深さ25 cm。奈良時代後半の土師器甕2個を口縁に底部を重ねて掘形の中央から南寄りに横たえ、主軸を南北に埋納する。掘形北寄りに土器片が多く、もう一点甕があった可能性もある。掘形の埋土は黄灰色砂、甕内土は暗褐色砂質土である。北に接して SX6461がある。

SX6461 6AHG-P 地区 (Pl. 18, Fig. 15, Ph. 24)

東一坊大路 SF6410路面上の西側溝寄りにある土器埋納遺構で、SX6460の北に接してある。七条条間北小路との交差点から北へ7 mに位置する。掘形は南北130 cm以上、東西61 cmの長円形で、残存深さ30 cm。奈良時代後半の土師器甕2個を合口にして掘形の中央北寄りに横たえ、主軸を南北に埋納する。掘形埋土は黄灰色砂質土、甕内土は暗灰色砂質土である。

SX6485 6AHH-Q 地区 (Pl. 13, Fig. 15, Ph. 24)

東一坊大路西側溝 SD6400内の西岸寄りの土器埋納遺構。北小路北側溝から32 mに位置する。西側溝の堆積土中にあり掘形不明瞭。土器の検出範囲は南北60 cm、東西37 cmで、奈良時代後半の土師器甕2個を合口にして横たえ、主軸を南北に据える。

SX6533 6AHH-G 地区 (Pl. 14, Fig. 15, Ph. 24)

交差点の土器埋納坑

東一坊坊間東小路 SF6535路面上の土器埋納遺構。坊間東小路心にあり、交差点中央から南へ2.5 mに位置する。掘形は南北47 cm、東西31 cm、残存深さ11 cmで、奈良時代後半の土師器甕1点を横たえ、主軸を南北に埋納する。口縁と掘形の間には空間があり、有機質の蓋が存在した可能性がある。上半が削平され、甕の下半分が残る。

SX6649 6AHH-I 地区 (Pl. 5)

十六坪北西部の SB6652南の土器埋納遺構。東小路東側溝から22 m、北面築地雨落溝想定位置から23 mに位置する。掘形は直径70 cmほどの不整円形で、土師器碗多数が出土した。

SX6530 6AHH-G 地区 (Pl. 14・20, Ph. 22)

七条条間北小路南側溝 SD6471の溝底で検出した祭祀土坑。小路交差点から東10~16 mにあり、東西6.2 m、側溝の底から50 cm掘込む。西端から2 m付近に馬上顎骨2点・下顎骨1点・脚部骨、3.2 m付近に土師器甕、1.4 m付近に人面墨書土器1点・馬上顎骨1点、4.8 m付近に須恵器壺・須恵器杯などが出土した。土器は平城宮土器IIに属す。

SK6531 6AHH-G 地区 (Pl. 14)

祭祀土坑

七条条間北小路北側溝内の土坑。小路交差点から東へ9 mにある。東西5.4 m、南北1.5 m、

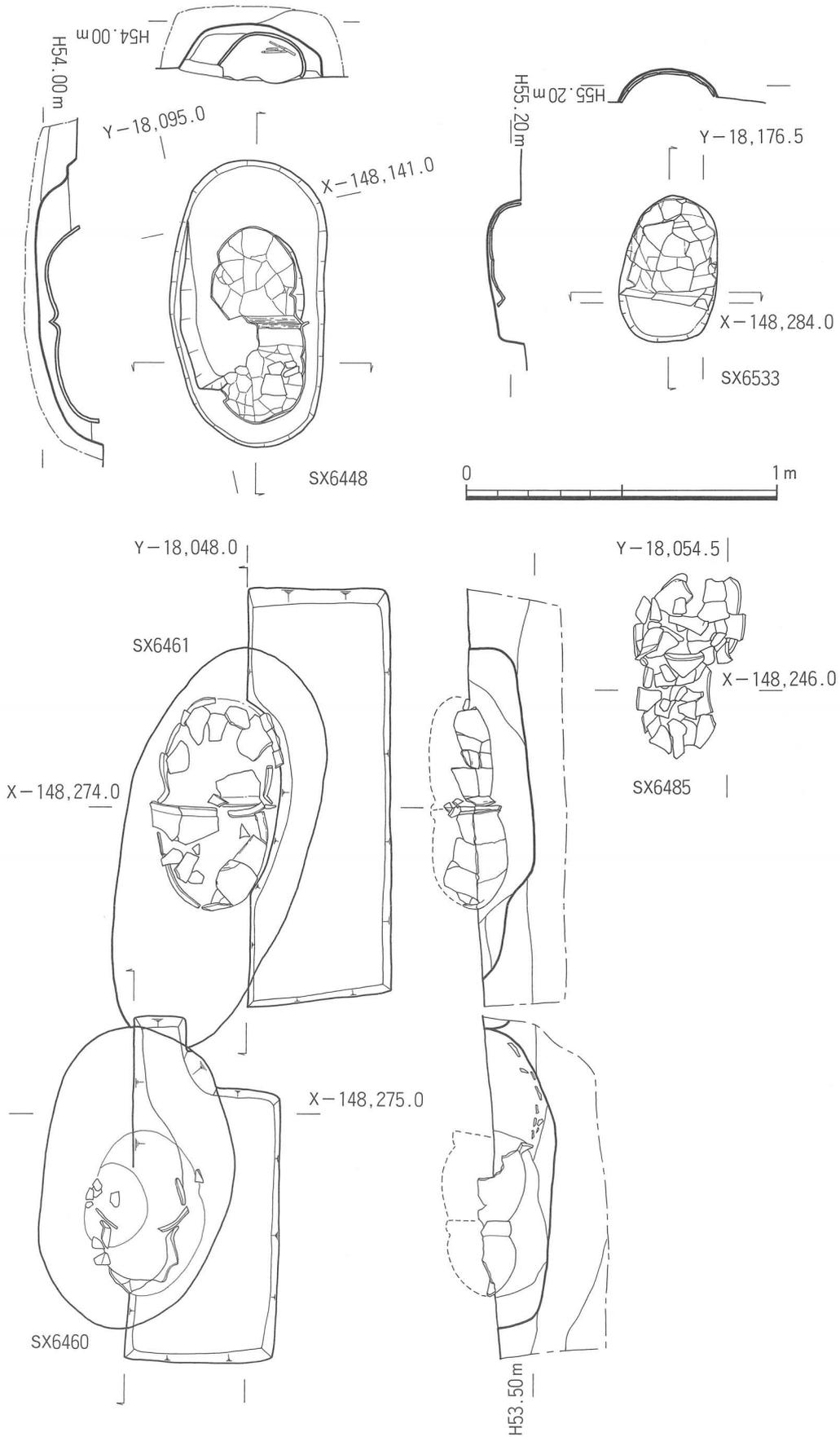


Fig. 15 土器埋納遺構

北側溝底から40 cm 掘込む。北小路を挟んでSX6530の真北にあり、規模も似るが、祭祀関連遺物は出土しなかった。

ii 平安時代の遺構

SX6428 6AHH—H 地区

(Pl. 8, Fig. 16, Ph. 22)

木 棺 墓

十六坪の東辺中央で検出した木棺墓。西側溝西岸から西へ9 m、十六坪北端から南へ57 m に位置する。墓坑掘形は南北に長い長方形で、南北長202 cm、北端幅65 cm、南端幅58 cm と南辺に比して北辺がわずかに長い。残存深さは19 cm で、墓坑掘形の法面はほぼ垂直である。木棺は完全に腐朽しているが、側板・底板が腐朽した厚さ2～3 cm の暗灰色粘質土の範囲からみて、法量は長175 cm、北端幅56 cm、南端幅49 cm、高さ19 cm 以上と推定される。木棺の主軸は、北で西へ0°30′ の振れを測る。木棺中央部の下には長53 cm、幅・深さ3 cm の暗灰色粘質土が東西方向に残る。断面3 cm の角材を

主軸と直交して据え、棧としたものらしい。墓坑西面に接して木棺を納めており、墓坑掘形との間に北側で40 cm、東側12 cm、南側28 cm の間隙があり、これを灰褐色粘質土で埋めている。遺骸は残存していないが、木棺の痕跡や副葬品の配置から見て北頭位であろう。副葬品は棺内北端に集中する。ガラス玉1点を中心にして、北東部に漆器方形箱を置き、南東部に承和昌宝1枚・土師器椀・漆器椀を重ね、北西部に土師器甕・皿、南西部に須恵器平瓶・承和昌宝を置く。承和昌宝は承和2年(835)初鑄であり、埋葬時期はこれ以降の9世紀後半と考えられ、土器の形式もこれを裏付ける。

iii 橋 状 遺 構

SX6420 6AHG—Q・6AHH—H 地区 (Pl. 8, Fig. 17, Ph. 21)

橋 脚 柱 根

東一坊大路西側溝SD6400にかかる橋。十六坪の北端から42 m、南端から81 m に位置する。西側溝の西岸に近い底に橋脚柱根3本、溝中央の底に柱穴3、大路側東岸に石組みが残る。西岸に近い3本の橋脚は、下端を杭状に尖らせた丸太を掘形に落とし込んだ後に打ち込んでいる。

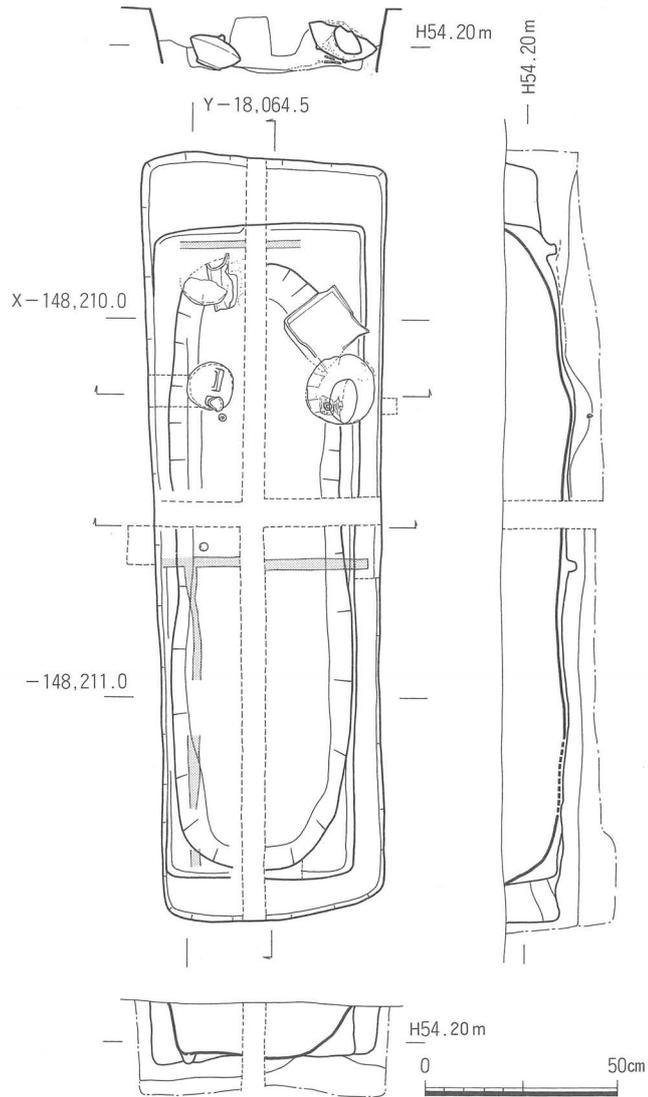


Fig. 16 木棺墓 SX6428 1 : 20

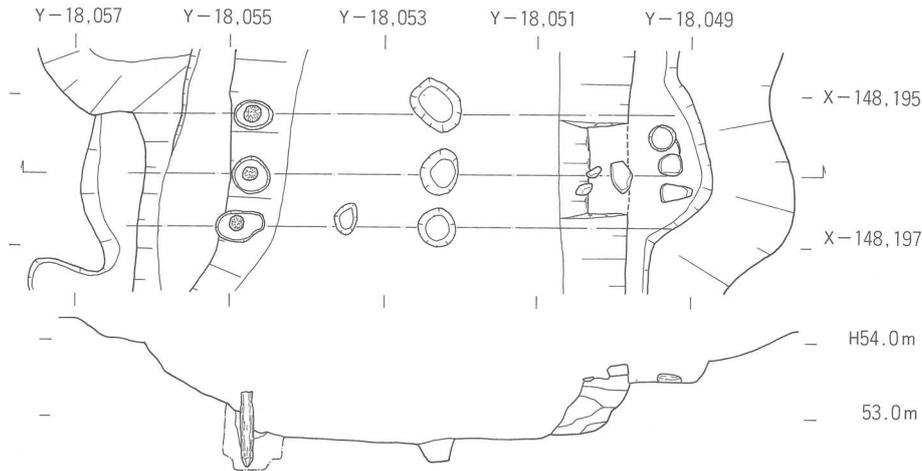


Fig. 17 橋状遺構 SX6420 1 : 100

梁行の柱間寸法は南間が0.7 m、北間が0.8 mである。この上に橋桁を載せ、板を張ると橋幅は6～7尺程度になる。柱根列と柱穴列の間隔は2.4 m(8尺)である。溝中央の3柱穴には、柱根は残っていない。溝東岸には拳大～人頭大の河原石と石抜き取り跡があるが、溝に近い石は西側溝の新しい堆積上にあり、原位置を保っていないようである。東岸の大路側の構造は不明であるが、石組みの上に梁材を転ばしに置き、その上に橋桁を載せるような手法を想定しよう。西岸には構造を示すような痕跡は残っていなかった。3本の橋脚はいずれもヒノキ丸太である。橋脚南材は残存長90 cm、径13 cm(4.5寸)、外周を手斧はつりした後、槍鉋で仕上げる。下端から18 cm程を手斧で杭状に尖らせている。中央材は残存長99 cm、径15 cm(5寸)で外周は手斧はつりのままで、下端から18 cm程を手斧で尖らせる。北材は残存長100 cm、径17 cm(5.5寸)で、外周は樹皮を剥がしたままである。下端は斜めに削っただけである。造営時期は不明である。

SX6480 6AHG—P 地区 (Pl. 18)

東一坊大路西側溝 SD6400の西岸寄りの底にある斜杭4本。条間北小路北側溝から14 m、交差点から北へ19 mに位置する。直径10 cm前後の杭が、西側溝の西法面下端付近から斜めに40 cm前後突出する。2本ずつ組になり、北の2本は間隔40 cm、南の2本は間隔30 cm。両者は1.4 m離れる。護岸用しがらみとしては、打ち込み角度が不自然で、橋状構造の下部になる可能性がある。時期は不明である。

SX6473 6AHH—G 地区 (Pl. 17)

七条条間北小路南側溝 SD6471の狭くなった部分。東一坊大路西側溝から46 mに位置する。条間北小路南側溝の幅はこのあたりで1.2 mあるが、この2.2 mの区間で北岸を南に寄せて0.9 mに狭める。板を掛け渡して橋としたものか

SX6525 6AHH—G 地区 (Pl. 16, Ph. 21)

七条条間北小路南側溝 SD6471に架かる橋で、橋脚2本を検出した。十五坪西端から40 mに位置する。橋脚の間隔は1.8 m(6尺)で、造営尺は30.0 cmを測る。これに橋桁を架け、板を張れば、幅7尺程の橋になろう。

SX6532 6AHH—G 地区 (Pl. 14, Ph. 21)

東一坊坊間東小路東側溝 SD6534に架かる七条条間北小路の橋。北小路心から南に寄る。橋脚

の柱穴2列4基を検出した。橋脚の桁行柱間は南側が2.5尺北側が3尺で、梁行は7尺弱である。橋脚は杭打したものらしい。橋幅7尺ほどに復原できよう。

iv その他の遺構

SX6402 6AHC-J・6AHD-A 地区 (Pl. 2、Ph. 6)

六条大路・東一坊大路交差点北方の沼状の広い落ち込み。東西33 m、深さ1.2 m で、北および南西へ広がる可能性がある。

SD6403 6AHC-J 地区 (Pl. 2)

SX6402の底で検出した北で西へ振れる斜行溝。幅1.6 m、深さ1 m。

SD6404 6AHC-J 地区 (Pl. 2)

SX6402の底で検出した北で西へ振れる斜行溝。幅0.8~1.5 m。SX6403の西側にある。

SX6422 6AHH-I 地区 (Pl. 4、Fig. 18、Ph. 23)

西側溝 SD6400内の西岸底近くにある曲物埋設遺構。十六坪の北端から8 m に位置する。掘形は東西61 cm、南北72 cm の長円形で、底を抜いた木製曲物を2段に重ねる。西側溝からの取水用の施設であろうか。上段の曲物は径45 cm、高9 cm、厚4 mm、外枠材4 mm で、厚さ6 mm の底板が一部残存していた。下段の曲物は径35 cm、高22 cm、厚4 mm、外枠材4 mm である。底は砂で、掘形の埋土は暗灰細砂である。西側溝の層序から平安時代前半期の遺構と考える。

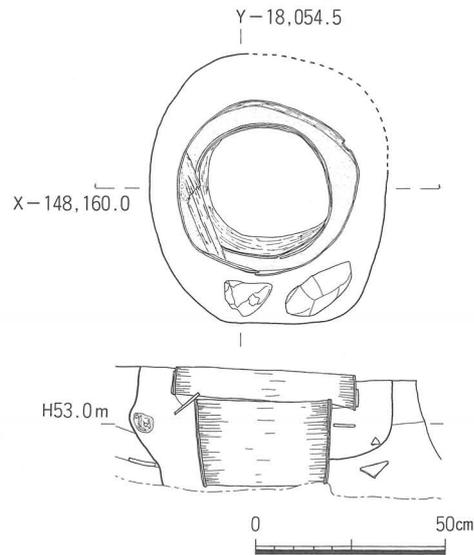


Fig. 18 曲物埋設遺構 SX6422 1 : 20